

植物知識

牧野富太郎

青空文庫

まえがき

花は、率そつちよく直ちよくにいえば生殖せいしよつぎ器きである。有名な蘭らん学がく者しゃの宇う
 田だ川がわ榕よう庵あん先生せんせいは、彼の著ちよ『植けい学げん啓げん源げん』に、「花は動物の陰いん
 処よの如ごとし、生産はん蕃そく息との資とりて始はじまる所ところなり」と書いておられる。

すなわち花は誠まことに美び麗れいで、且かつ趣き味みに富とんだ生殖せい器しであつて、動

物の醜みにくい生殖せい器きとは雲う泥んでいの差さがあり、とても比くらべものにはなら

ない。そして見たところなんの醜しゆう悪あくなどところは一点もこれな

く、まったく美み点てんに充みち満みちている。まず花か弁べんの色いろがわが眼ひを惹ひ

きつける、花香^{かこう}がわが鼻を撲^うつ。なお子細^{しさい}に注意すると、花の形でも萼^{がく}でも、注意^{あたい}に値^{あたい}せぬものはほとんどない。

この花は、種子^{たね}を生ずるために存在している器官である。もし

種子を生ずる必要がなかったならば、花はまったく無用の長^{ちようぶ}

物^つで、植物の上には現^{あらわ}れなかったであろう。そしてその花形^{かけい}、

花色^{かしよく}、雌雄蕊^{しゆうずい}の機能は種子を作る花の構^{かま}えであり、花の天か

ら受け得た役目である。ゆえに植物には花のないものはなく、も

しも花がなければ、花に代わるべき器官があつて生殖^{つかさど}を司^{つかさど}つてい

る。(ただし最も下等なバクテリアのようなものは、体が分裂し

て繁殖^{はんしよく}する。)

植物にはなにゆえに種子が必要か、それは言わずと知れた子孫^{しそん}

を継ぐ根源であるからである。この根源があればこそ、植物の種属は絶えることがなく地球の存する限り続くであろう。そしてこの種子を保護しているものが、果実である。

草でも木でも最も勇敢に自分の子孫を継ぎ、自分の種属を絶やさぬことに全力を注いでいる。だからいつまでも植物が地上に生活し、けっして絶滅することがない。これは動物も同じことであり、人間も同じことであつて、なんら違ったことはない。この点、上等待等の生物みな同権である。そして人間の子を生むは前記のとおり草木と同様、わが種属を後代へ伝えて断やさせぬためであつて、別に特別な意味はない。子を生まなければ種属はついに絶えてしまふにきまつている。つまりわれらは、続かず種

属の中継ぎ役なかつをしてこの世に生きているわけだ。

ゆえに生物学上から見て、そこに中継ぎなかつをし得なく、その義務おこたを怠おこたっているものは、人間社会の叛逆者であつて、独身者はこれに属すると言つても、あえて差しつかえはあるまいと思う。つまり天然自然の法則そむに背そむいているからだ。人間に男女がある以上、必ず配偶者を求むべきが当然の道ではないか。

動物が子孫を継つぐべき子供のために、その全生涯させいを捧たげていることは蝉せみの例でもよくわかる。暑い夏に鳴きつづけている蝉せみは雄お蝉せみであつて、一いっ生しょう懸命けんめいに雌め蝉せみを呼よんでいるのである。うすぎみまくランデブーすれば、雄おす蝉せみは莞爾かんじとして死出しでの旅路たびじへと急いぎ、憐あわれにも木から落ちて死骸しがいを地ちに曝さらし、蟻ありの餌えとなる。

しかし雌^{めす}蟬^{せみ}は卵を生むまでは生き残るが、卵を生むが最後、雄^{おす}蟬^{せみ}の後^{あと}を追って死んでゆく。いわゆる蟬^{せみ}と生まれて地上に出でては、まったく生殖のために全力を打ち込んだわけだ。これは草でも、木でも、虫でも、鳥でも、獣^{けもの}でも、人でも、その点はなら変わったことはない、つまり生物はみな同じだ。

われらが花を見るのは、植物学者以外は、この花の真目的を嘆^た美^んするのではなくて、多くは、ただその表面に現れている美を賞^し美^びするの^{よう}かん観^{かん}して楽しんでいるにすぎない。花に言わすれば、誠^{まこと}に迷^{めい}惑^く至^し極^{ごく}と歎^{かこ}つであろう。花のために、一^{いっ}掬^{きく}の涙があつてもよいではないか。

花

ボタン

ボタン、すなわち牡丹は中国の原産であるが、今は日本はもとより西洋諸国でも栽培さいばいしている。

だれでも知っているように、きわめて巨大な美花びかを開くので有名である。今その栽培してあるものを見ると、その花容かよう、花色かしよくすこぶる多様で、紅色、紫色、白はくしよく色、黄色などのものがあり、また一重咲ひとえざき、八重咲やえざきもあつて、その満開まんかいを望むと吾人ごじんはいつも、その花の偉容いよう、その花の華麗かれいに驚嘆きょうたんを禁じ得ない。

牡丹ぼたんに対し中国人は丹たん色しよくの花、すなわち赤せき色しよくのものを

上乗じょうじょうとしており、すなわち牡丹に丹の字を用いているのは、それがためである。また牡丹の牡は、春に根上からその芽が雄々しく出るから、その字を用いたとある。つまり牡は、盛さかんな意味として書いたものであろう。今はどうか知らぬが、昔は中国のある地方では、それが荆棘いげいのように繁しげつていて、原住民はこれを伐採つさいし燃料にしたと書物に書いてある。

牡丹はキツネノボタン科に属するが、この科のものはみな草そうほ本ほんであるにかかわらず、独ひとりこの牡丹ぼたんは落葉らくよう灌木かんぼくである。

草木そうほんなる芍薬しゃくやくに近縁きんえんの種類で、*Paeonia suffruticosa* Andr. の学名を有している。この種名の *suffruticosa* は、亞灌木あかんぼくの意

である。また *Paeonia moutan* Sims. の学名もあるが、この種名の

Moutan は牡丹の意である。そしてその属名の Paenonia は、 Paeon という古代の医者もとの姓名に基づいたものである。牡丹根皮は薬用となるので、それでこの医者しだいの名をつけた次第であろう。

日本では牡丹の音ボタンが、今日の通名となっている。

古歌にはハツカグサ、ナトリグサの名があり、古名にはフカミグサの名がある。右のハツカグサは二十日草はつかで、これは昔、藤原忠通ただみちの歌の、

咲きしより散り果つるまで見しほどに

花のもとにて廿日はつかへにけり

に基づいたもので、つまり牡丹の花の盛りが久しいことを称え
たものだ。

一つの花が咲き、次の蕾が咲き、株上のいくつかの花が残らず
咲き尽くすまで見て、二十日もかかったというのであろう。いく
ら牡丹でも、一輪の花が二十日間も萎まず咲いているわけではない。
中国では、牡丹が百花のうちで第一だから、これを花王と唱
えた。さらに富貴花、天香国色、花神などの名が呼ばれてい
る。宋の歐陽修の『洛陽牡丹の記』は有名なものである。

牡丹は、樹の高さ通常は九〇〜一二〇センチメートルばかりに
成長し、まばらに分枝する。春早く芽が出で、葉は互生して葉
柄があり、二回、三回分裂して複葉の姿をなしている。五月、

枝端したんに大なる花を開き、花径かけいおよそ二〇センチメートルばかりもある。花下かかにある五萼がくへん片は宿存しゆくそんして花後かごに残り、八片へんないし多片の花弁かべんははじめ内へ抱え込み、まもなく開き、香りかおを放つて花後に散落さんらくする。花中かちゆうに多雄蕊たゆうずいと、細毛さいもうある二ないし五個の子房しぼうとがあり、子房は花後に乾かわいた果実となり、のち裂さけて大きな種子あらわが露れる。

多くの年数を経た古い牡丹にあつては、高さが一八〇センチメートル以上に達して幹みきが太くなり、多くの枝えだを分かち、たくさんな葉を繁しげらし、花が一株上に数百輪りんも開花する。私は先年、この巨大な牡丹を飛騨ひだたかやま高山市の奥田邸ていで見たのだが、この株かぶはたぶん今でも健在しているであろう。これはその土地で、「奥田の牡ぼ

丹^{たん}」と評判せられて有名なものであつた。たぶんこんな大きな牡丹は、今^{こんにち}日日本のどこを捜しても見つからぬであろう。もし果たしてそうだとすれば、これは日本一の牡丹であると折り紙^{がみ}をつけてよかろう。もしも高^{たか}山^{やま}市^まへ赴^{おもむ}かれる人があつたら、一度かならずこの大牡丹^{おおぼたん}を見て来^こられてよいと思う。

ボタンの図

シヤクヤク

和名^{わめい}として今^{こんにち}日^{くに}わが邦^{くに}では、芍薬をシヤクヤクと字音^{じおん}で呼んでいることは、だれもが知っているとおりであるが、しかし昔は

これをエビスグサ、あるいはエビスグスリと称え、古歌ではカオヨグサといった。

エビスグサは夷草、エビスグスリは夷薬、ともに外国から来たことを示している。カオヨグサは顔美草で、花が美麗だから、そういつたものであろう。

元来、芍薬の原産地は、シベリアから北満州〔中国の東北地方の北部〕の原野である。はじめシベリアで採った白花品へ、ロシアの学者のパラスが、*Paonia albiflora* Pallas の学名をつけてその図説を発表したが、満州〔中国の東北地方一帯〕に産するものには、淡紅花のものが多い。しかしそれは、もとより同種である。種名の *albiflora* は、白花の意である。



日本に作っている芍薬は、中国から伝わったものである。今は広く国内に培養せられ、その花が美麗だから衆人に愛せられる。中国では人に別れる時、この花を贈る習慣がある。つまり離別を惜しむ記念にするのであろう。

芍薬は宿根性の草本で、その根を薬用に供する。春に根頭から勢いのよい赤い芽を出し、見てまことに気持がよい。充

分成長すると、高さはおよそ九〇センチメートル内外に達し、その直立せる莖は通常まばらに分枝する。葉は莖に互生し、再三出式に分裂している。各枝端に一花ずつ開き、直径はおよそ一二センチメートル内外もあろう。花下に五片の緑萼があるが、蕾の時には円く閉じている。花卉は平開し、およそ十片内外もあ

るが、しかし花容かよう、花色種々しゆじゆたよう多様で、何十種もの園芸的變わり品がある。花心かしんに黄色の多雄蕊たゆうずいと、三ないし五の子房しぼうがある。

芍薬しやくやくの姉妹品しまいひんで、わが邦くにの山地に見る白花品はつかひんは、ヤマシヤクヤクで、その淡紅花品たんこうかひんはベニバナヤマシヤクヤクである。花は芍薬に比べるとすこぶる貧弱だが、その果実はみごとなもので、熟じゆくして裂さけると、その内面が真赤色しんせきしよくを呈ていしており、きわめて美しい特徴とくちゆうを現あらわしている。

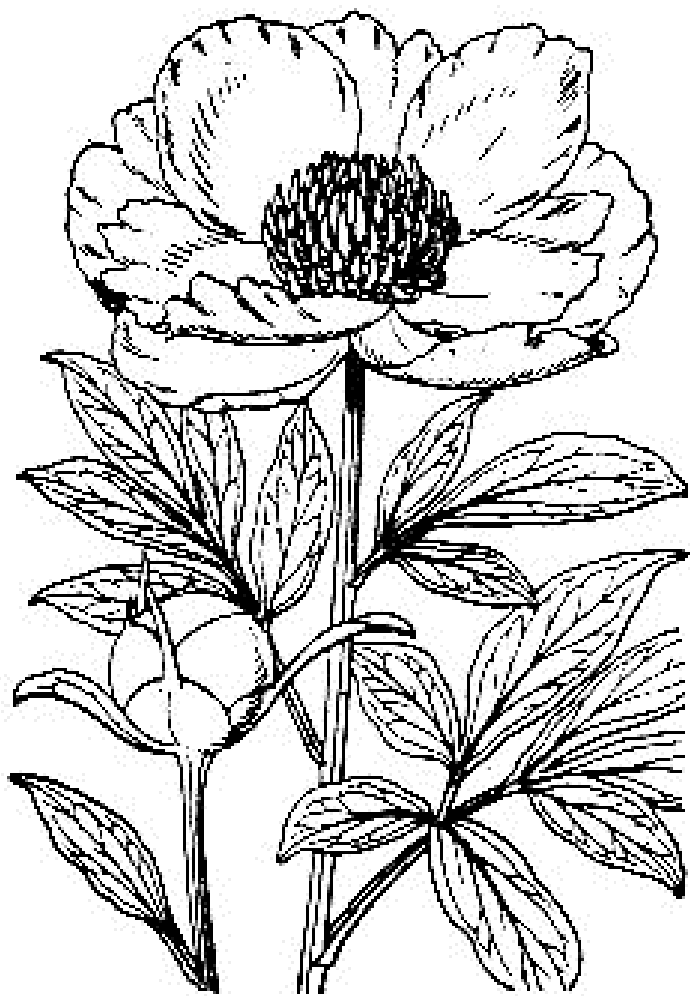
シヤクヤクの図

スイセン

スイセンは水仙を音読した、そのスイセンが今日日本の普通名となつてゐるが、昔はわが邦でこれを雪中花と呼んだこともあつた。元来、水仙は昔中国から日本へ渡つたものだが、しかし水仙の本国はけつして中国ではなく、大昔遠く南欧の地中海地方の原産地からついに中国に來り、そして中国から日本へ來たものだ。中国ではこの草が海辺を好んでよく育つといふので、それで水仙と名づけたのである。仙は仙人の仙で、この草を俗で脱している仙人に擬えたものでもあろうか。

水仙はヒガンバナ科に属して、その学名を *Narcissus tazetta* L.

・といふのだが、この種名の *Tazetta* はイタリア名の小皿の意で、すなわちその花中の黄色花冕を小皿に見立てたものである。



そして属名の *Narcissus* は麻痺まひの意で、それはその草に含まれているナルキツシネという毒成分に基づいたものである。

水仙すいせんの花は早春に咲く。すなわち地中の球根きゅうこん（球根は俗

くげん）言くげんで正しくいえば襲しゅう重鱗ちゆうりん茎けい）から、葉と共に花茎かけい（植物

学上の語でいえば葶てい）を抽ひいて直立し、茎けい頂ちように数花を着つけて

横よこに向かつている。花には小梗しょうこうがあり、もとの方にはこれを

擁ようして膜質まくしつの苞ほうがある。そして小梗しょうこうの頂いただきに、緑色の子房しぼう

（植物学では下位子房かいしぼうといわれる。下位子房かいしぼうのある花はすこぶる

多く、キュウリ、カボチャなどの瓜類うり、キキョウの花、ナシの花、

ラン類の花、アヤメ、カキツバタなどの花の子房はみな下位でい

ずれも花の下、すなわち花の外くわいに位ちしている）があり、子房の上

は花筒となり、この花筒の末端に白色の六花蓋片が平開し、花としての姿を見せよい香を放っている。そしてこの六花蓋の外列三片が萼に当たり、内列三片が花弁である。

このように、花弁と萼との外観が見分け難いものを、植物学では便利のため花蓋と呼んでいる。この開展せる瑩白色花蓋六片の中央に、鮮黄色を呈せる皿状花冕を据え、花より放つ佳香と相まつて、その花の品位きわめて高尚であることに、われらは讃辞を吝しまない。そしてこの水仙の花を、中国人は金盞銀台と呼んでいる。すなわち銀白色の花の中に、黄金の盞が載っているとの形容である。

水仙花の花筒の内部には、黄色の六雄蕊があり、花筒の底

からは一本の花柱かちゅうが立って、その柱頭ちゅうとうは三岐きしており、したがって子房しぼうが三室さんしつになっていることを暗示している。そして花か下の子房かの中には、卵子らんしが入っている。それにもかかわらず、この水仙には絶たえて実を結ばないこと、かのヒガンバナ、あるいはシヤガと同様である。けれども球根きゅうこんで繁殖はんしよくするから、実を結んでくれなくつても、いつこうになんらの不自由はない。そうしてみると、水仙の花はむだに咲いているから、もつたいないことである。ちようど、子を生まない女の人と同じだ。

水仙は花はなに伴ともうて、通常は四枚、きわめて肥こえたものは八枚の葉が出る。草質そうしつが厚く、白緑はくりよくしよく色を呈ていしているが、毒分があるから、ニラなどのように食用にはならない。地中の球根を搗つき

つぶせば強力な糊のりとなり、女の乳癌にゅうがんの腫れたのにつければ効きくといわれる。

元がんらい来、水仙かいへんは海辺地方の植物であつて、山地に生はえる草で

はない。房州ぼうしゅう〔千葉県ちばけんの南部〕、相州そうしゅう〔神奈川県かながわけんの一部

〕、その他諸州しよしゅうの海辺地には、それが天然生てんねんせいのようになつ

て生はえている。これはもと人家じんかに栽培さいばいしてあつたものが、いつ

のまにかその球根が脱出して、ついに野生やせいになつたもので、もと

より日本の原産ではない。このように野生になつてゐる所では、

玉玲瓏ぎよくれいろうと中国で称する八重咲やえざきの花が見られる。また青花と

呼ばれる下品な花あらわも現れる。

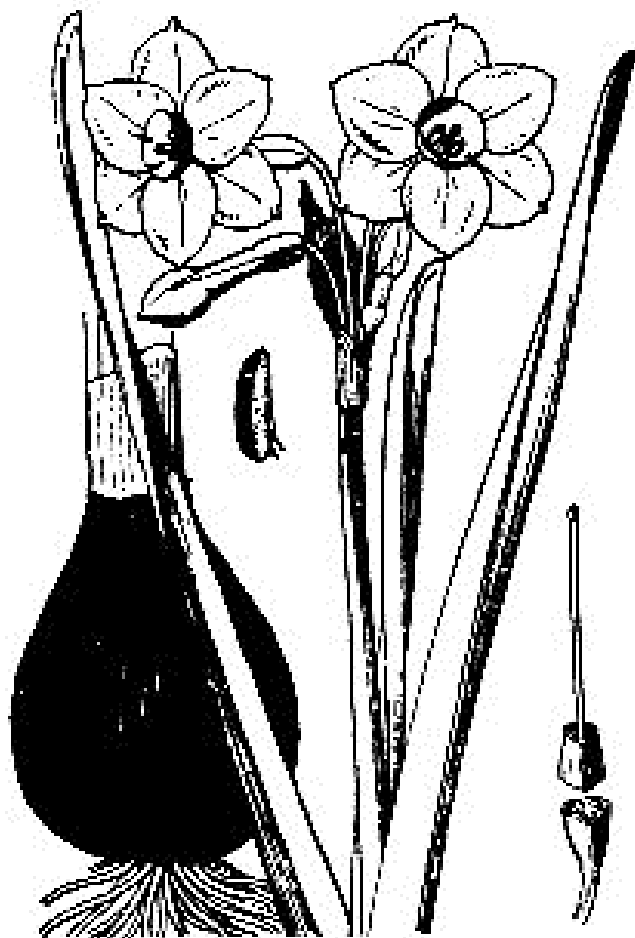
支那水仙といつて、能よく（このような場合のヨクは能の字を書

くのが本場で、近ごろのように一点張りに良の字を書くのは誤りである。これは can と good とを混同視したものだ。チョット老婆心までに。水盆に載せて花を咲かせているものがあるが、これは人工で球根を割き、多数の花茎を出させたものだ。けっして別種の水仙ではない。こんな球根への細工は、その方法をもつてすれば日本でもできる。

スイセンの図

キキヨウ

キキヨウは漢名、すなわち中国名である桔梗の音読で、こ



れが今こんにち日わが邦くにでの通名つうめいとなつてゐる。昔はこれをアリノヒフキと称とえたが、この名ははやくに廢すたれて今はいわない。また古ききようくは桔梗ききようをオカトトキといったが、これもはやく廢語はいごとなつた。このオカトトキのオカは岡で、その生はえてゐる場所を示し、トトキは朝鮮語でその草を示してゐる。このトトキの語が、今こんにち日な お日本の農民間に残つて、ツリガネソウ一名ツリガネニンジン、すなわちいわゆる沙参しやじんをそういつてゐる。

右のオカトトキを昔はアサガオと呼んだとみえて、それが僧昌しやうようじゆうあらわ住ぢゆうの著したわが邦くに最古の辞書である『新撰しんせん字鏡じきやう』に載のつ

ている。ゆえにこれを根こん拠きよとして、山やま上のう憶え良のおくらの詠よんだ万葉歌の秋ななくさの七種ななくさの中のアサガオは、桔梗ききようだといわれている。今

人家じんかに栽培さいばいしている蔓草つるくさのアサガオは、ずっと後に牽牛子けんぎゅうしとして中国から来たもので、秋の七種ななくさ中ちゆうのアサガオではけつしてないことを知っていなければならぬ。

キキョウはキキョウ科ちよめい中ちゆう著ちよめい名めいな一草いちそうで、*Platycodon grandiflorum* A. DC. の学名を有する。この属名しゆめいの *Platycodon* はギリシア語の広い鐘かねの意で、それはその広く口を開あけた形の花冠かかんに基もとづいて名づけたものである。そして種名しゆめいの *grandiflorum* は、大きな花の意である。

キキョウは山野さんやの向陽地こうようちに生じている宿根草しゆつこんそうであるが、その花がみごとであるから、観賞花草くわんしょうくわくそうとして能よく人家じんかに栽うえられである。莖くきは直立して、九〇ないし一五〇センチメートルばかり

て開くから、自分の花の花粉を受けることができず、そこで昆虫の助けを借りて、他の花の花粉を運んでもらうのである。つまり桔梗花ききようかは、自家結婚ができないように、天から命ぜられているわけだ。植物界のいろいろな花には、こんなのがザラにある。花を研究してみると、なかなか興味のあるもので、ナデシコなどもその例に漏れもなく、もしも今昆虫が地球上におらなくなつたら、植物で絶滅するものが続々とできる。

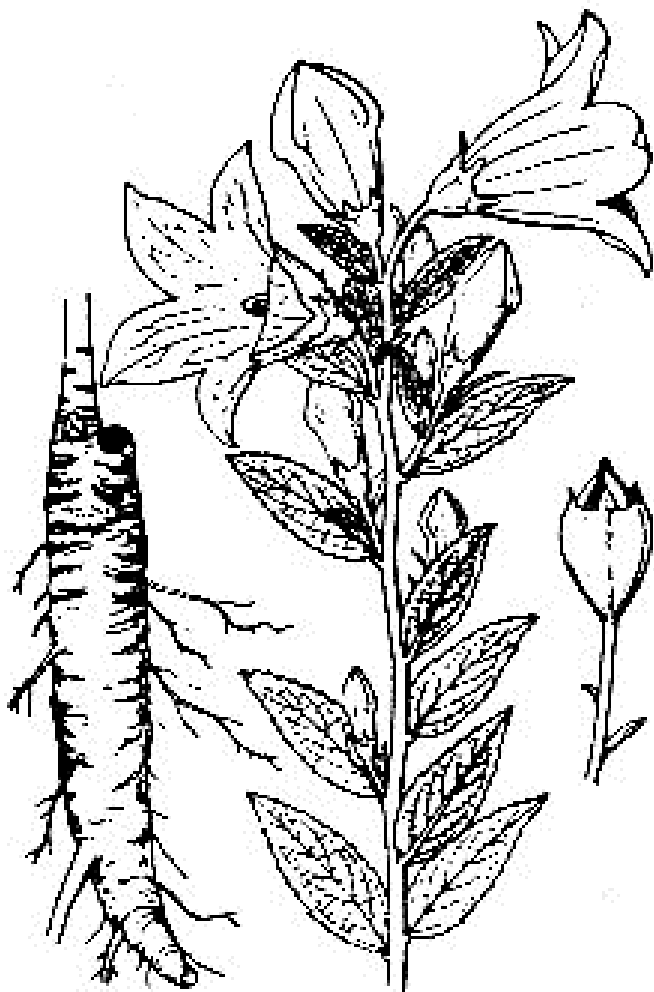
花の時の子房しぼうは緑色で、その上縁じょうえんに狭小きょうしょうな五萼がくへん片ががある。花後かご、この子房しぼうは成熟して果実となり、その上方しやうこの小孔こうより黒色の種子が出る。

地中に直下する根は多肉たにくで、桔梗根ききようこんと称し祛痰剂きよたんざいとなるの

で、したがってこの桔梗きぎようがたいせつな薬用植物の一つとなっている。春に芽出めだつ新葉しんようの苗なえは、食用として美味びみである。
 キキヨウの図

リンドウ

リンドウというのは漢名かんめい、龍胆りゆうきの唐音とうおんの音転おんてんであつて、今これが日本で、この草の通称となつている。中国の書物によれば、その葉は龍葵りゆうきのようで味が胆きものように苦にがいから、それで龍胆りゆうきといふのだと解釈してあるが、しかし葉が苦にがいというよりは根の方がもつと苦にがい、すなわちこの根からいわゆるゲンチアナチ



ンキが製せられ、健胃剤けんいざいに使われている。

リンドウは昔ニガナといった。すなわち、その草の味が苦にがいからであるう。また播州ばんしゅう〔兵庫県南部〕ではオコリオトシというそうだが、これもその草を煎せんじて飲めば味が苦にがいから、病気のオコリがオチル、すなわち癒なほるといっているのであるう。また葉が笹ささのようであるから、ササリンドウの名もある。

リンドウは向陽こうようの山地、もしくはは原野の草間そうかんに多く生ずる宿根草しゅつこんそうで、茎くきは三〇〜六〇センチメートルばかり、葉は狭せまくとがて尖り無柄むへいで茎いたを抱いて対生たいせいし、全辺で葉ようちゆう中に三縦脈じゆうみやくがあり、元来がんらい緑色なれど、日を受けて往々おうおう紫色に染そんでいる。秋更ふけての候こう、その花は茎頂けいちように集合して咲き、また梢葉しょうようえ

腋きにも咲く。花下かかに緑萼りよくがくがあつて、尖とがつた五つの狭長きょうちよう片へんに分かれ、花冠かかんは大きな筒つつをなし、口は五裂れつして副片ふくへんがある。この花冠かかんは非常に日光に敏感びんかんであるから、日が当たると開き、日がかげると閉とじる。

ゆえに雨天うてんの日は終しゆうじつ日開ひあがなく、また夜中もむろん閉とじている。閉じるとその形が筆ふでの穎ほの形をしていて振ねじれたたんでいる。色は藍紫色らんししよくで外は往々かつししよく褐紫色ていを呈ていしているが、まれに白花のものがある。筒とうちゆう中に五雄蕊ゆうずいと一雌蕊しずいが見られる。花後かごには、宿存花冠しゆくそんかかんの中で長莢ちようきよう状の果実が熟じゆくし、二つに裂さけて細かい種子が出る。このように果実が熟した後莖くきは枯かれ行き、根は残るのである。

花は形が大きく且かつはなはだ風情ふうせいがあり、ことにもろもろの花のなくなつた晩ばん秋しゅうに咲くので、このうえもなく懐なつかしく感じ、これを愛する気が油ゆう然ぜんと湧わき出るのを禁じ得ない。されども、人々が野や山より移して庭に栽さい植しょくしないのはどうしたものか、やはり、野に置けれんげさうの類かとも思えども、しかしさう野でこれを楽しむ人もないようだ。

リンドウはリンドウ科に属し、わが邦くにでは本科中の代表者といつてよい。そしてその学名は *Gentiana scabra* Bunge var. *Buergeri* Maxim. である。この学名中にある var. はラテン語 *varietas* (英語の *variety*) の略字で、変種ということである。

このリンドウ属 (*Gentiana*) には、わが邦くにに三十種以上の種類

があるが、その中でアサマリンドウ、トウヤクリンドウ、オヤマ
 リンドウ、ハルリンドウ、フデリンドウ、コケリンドウなどは著
 名な種類である。右のアサマリンドウは、伊勢〔三重県〕の朝あさま
 熊山やまにあるから名づけたものだが、また土佐〔高知県〕の横倉よこぐ
 山らやまにも産する。

根の味が最もにが苦く、能く振り出して健胃けんいのために飲いん用ようするセ
 ンブリは、一いっにトウヤクともいい、やはりこのリンドウ科に属す
 れど、これはリンドウ属のものではなく、まったく別属のもので、
 その学名を *Swertia japonica Makino* といい、効力ある薬用植物と
 して『日本薬局方』に登録せられている。秋に原野に行けば、採
 集ができる。

リンドウの図

アヤメ

アヤメといえ、だれでもアヤメ科中の *Iris* 属のものと思つて
いるでしょう。それもそのはず、今日ではアヤメと呼べば一般
にそうなつてゐるからだ。しかし嚴格にいえば、このアヤメはま
さにハナアヤメといわねばならぬものであつた。なんとなれば、
一方に本当のアヤメがあつたからだ。とはいへ、この本当のアヤ
メの名は、実は今日ではすでに廃れてすたそうはいわず、ただ古歌こか
どの上に残つてゐるにすぎない運命となつてゐるから、そう心配



するにも及ぶまい。

右に古歌こかといつたが、その古歌とはどんな歌か、今試こころみに数すうし首ゆを次に挙あげてみよう。

ほととぎす厭いとふときなしあやめぐさ

かづらにせん日こ此ゆ鳴きわたれ

ほととぎす待てど来鳴かずあやめぐさ

玉に貫ぬく日をいまだ遠みか

あやめぐさひく手もたゆくながき根の

いかであさかの沼おに生ひけむ

ほととぎす鳴くやさつきのあやめぐさ

あやめも知らぬ恋もするかな

などがある。さてこの歌にあるアヤメグサ、すなわちアヤメは、シヨウブすなわちはくしやう白菖はくしやうのことである。(世間一般に今シヨウブと呼んでいる水草みずくさを菖蒲と書くのは間違いで、菖蒲は実はセキシヨウの中国名である。シヨウブの名はこの菖蒲から出たものではあれど、それは元がんらい来は間違いであることをわきまえていなければならぬ。)そして前の Iris 属のハナアヤメとは、まったく違った草である。

昔、右のシヨウブをアヤメといていた時代には、今の Iris 属のアヤメは、前記のとおりハナアヤメと違って花を冠かんしていたが、

シヨウブに対するアヤメの名が廃れた後は、単にアヤメと呼ぶようになり、これが今日こんにちの通称となつている。すなわち白菖はくしょうがアヤメであつた時は、今日こんにちのアヤメがハナアヤメであつたが、アヤメの名がシヨウブとなるに及んで、ハナアヤメがアヤメとなり、時代により名称にへんせん変遷のあつたことを示している。

あまねく人の知つているかの潮来節いたこぶしの俚謡りように、

潮来出島いたこでじまのまこもの中にあやめ咲くとはしおらしい

というのがあつた。この謡うたはその中にあるアヤメがこんがらかつて、ウソとマコトとで織おりなされてゐる。すなわちこの謡うたの作者

は、謡うたのアヤメを美花びかの咲く Iris のアヤメとしているけれど、この Iris のアヤメは、けっして水中に生はえているマコモの中に咲くことはない。そしてこのアヤメは陸草りくそうだから水中には育たない。マコモといっしょになって生はえている水草のアヤメは、古名こめいのアヤメで今のシヨウブのことであるから、これならマコモの中にいっしょに生はえていても、なにも別に不思議ふしぎはない。

サーことだ、美花びかを開くアヤメはマコモの中にはなく、マコモの中に生はえているアヤメは、つまらぬ不顕著ふけんちよな緑色の細かい花が、グロ的な花穂かすいをなしているにすぎなく、ふつうの人はあまりこの花を知っていないほどつまらぬ花だ。

上の謡うたの「まこもの中にあやめ咲くとはしおらしい」のアヤメ

は、マコモの中に咲かなく、つまらぬ花を持った昔のアヤメ（シヨウブ）が咲くばかりであるから、この俚謡りようの意味がまったくめちやくちやになっている。謡うたはきれいな謡だが、実物上からいえば、まったく事実を取り違えたつまらぬ謡うただ。はじめてその事実の誤りあやまを摘てきはつ発はつして世に発表したのは私であつて、記事の題は、「実物上から観みた潮来出島いたこでしまの俚謡りよう」であつた。それはちようど今から十六年前の、昭和八年のことだ。

アヤメの図

カキツバタ



アヤメを書いたついでに、それと同属のカキツバタについて述べてみよう。

カキツバタの語原は書きつけ花の意で、その転訛^{てんか}である。すなわち、書きつけは摺^すり付け^つけることで、その花^{かじゆう}汁^{じゆう}をもって布を摺^すり染^そめることである。昔はこのような染め方が行われて、カキツバタの花の汁^{しる}を染^{せんりよう}料^{りよう}にしたのである。

その証^{しょうこ}拠^こには『万葉集』に次の歌がある。

住^{すみのえ}吉^{あささ}の浅^{さは}沢^{はをぬ}小野^{をぬ}のかきつばた

衣^{きぬ}に摺^すりつけ著^きむ日^ひ知らずも

かきつばた衣^{きぬ}に摺^すりつけ丈夫^{ますら}の

きそひ獵かりする月は来にけり

この二つの歌を見れば、カキツバタの花の汁しるで布を染そめたことが能よくわかる。(こういう場合の「よく」を「良く」と書いてはいけない。)

今からおよそ十年余あまりも前に、広島県安芸あきの国〔県の西部〕の北ほつきよう境やしたなる八幡村で、広さ数百メートルにわたるカキツバタの野生群落やせいぐんらくに出逢であい、折おりふし六月で、花が一面に満開して壯觀そうかんを極きわめ、大いに興きようを催もよおし、さつそくたくさんな花を摘つんで、その紫しじゆう汁じゆうでハンケチを染そめ、また白シャツに摺すり付けてみたら、たちまち美麗びれいに染そまって、大いに喜んだことがあった。その時ききゆう、興きよう

に乗じて左の拙句を吐いてみた。

衣きぬに摺すりし昔の里かかきつばた

ハンケチに摺すつて見せけりかきつばた

白シャツに摺すり付けて見るかきつばた

この里に業なりひら平来ればここも歌

見劣みおとりのしぬる光淋屏風こうりんびょうぶかな

見るほどに何なんとなつかしかきつばた

去ぬいは憂うし散るを見果みはてんかきつばた

世人せいじん、イヤ歌読みでも、俳人はいじんでも、また学者でも、カキツバ

夕を燕子花と書いて涼すずしい顔をして納おさまりかえっているが、なんぞ知らん、燕子花はけつしてカキツバタではなく、これをそういうのは、とんでもない誤あやまりであることを吾人ごじんは覺さとらねばならない。

しからばすなわち燕子花とはなにか、燕子花の本物はキツネノボタン科に属するヒエンソウの一種で、オオヒエンソウ、すなわち *Delphinium grandiflorum* L. と呼ぶ陸りく生せい宿しゅつ根こん草そう本ほんで、藍あいい色の美び花かを一かすい花か穂いに七、八花も開くものである。その花形かけいが、あたかも燕つばめが飛んでいような恰かつこう好こうから、それで燕子花の名がある。茎くきは細長く、高さおよそ六〇センチメートル内外で立ち、葉は細かく分裂し茎くきに互生ごせいしている。そしてこの草は中国の北地げんや、ならびに満州〔中国の東北地方〕には広く原野げんやに生じているが、

わが日本にはあえて産しない。

燕子花と同様な大間違おおまちがいをしていゝるものは、紫陽花である。

日本人はだれでもこの紫陽花をアジサイと信じ切つていれど、これもまことにおめでたい間違まちがいをしていゝるのである。この紫陽花は、中国人でもそれが何であるか、その実物を知つていないほど不明な植物で、ただ中国の白樂天はくらくてんの詩集に、わずかにその詩が載のつていゝるにすぎないものである。元来がんらい、アジサイは海岸植物のガクアジサイを親として、日本で出しゅっせい生せいした花で、これはけつして中国物ではないことは、われら植物研究者は能よくその如何いかんを知つていゝるのである。

カキツバタは水辺、ならびに湿地しつちの宿根草しゅっこんそうで、この属中一

番鮮美せんびな紫花を開くものである。葉は叢生そうせいし、鮮緑せんりよく色で
 幅はば広く、扇形せんけいに排列はいれつしている。初夏しよかの候、葉ようちゆう中から茎くきを
 抽ひいて茎けい梢しように花を着つける。花のもとに二、三片の大きな緑りよく
 苞ほうがあつて、中に三個の蕾つぼみを擁ようし、一日に一花かずつ咲き出いでる。
 花は花下かかに緑色の下位子房かいしぼうがあり、幅はば広い萼がく三片が垂たれて、花
 を美しく派手はでやかに見せており、狭い花弁かべん三片が直立し、アヤメ
 の花と同じ様子ようすをしている。花中の花柱かちゆうは大きく三岐きし、その
 端はしに柱頭ちゆうとうがあり、その三岐片きへんの下には白色薬やくの雄蕊ゆうずいを隠し
 ている。この花も同属のアヤメ、ハナシヨウブ、イチハツなどと
 同じく虫媒花ちゆうばいかで、昆虫により雄蕊ゆうずいの花粉が柱頭に伝えられる。
 花がすむと子房しぼうが増大し、ついに長橢円ちようだえんじよう状円柱形の果実とな

り開裂して種子が出るが、果内は三室に分かれている。

花色は紫のものが普通品だが、また栽培品にはまれに白花のもの、白地に紫斑のものもある。きわめてまれに萼、花卉が六片になった異品がある。

学名を *Iris laevigata* Fisch. と称するが、その種名の *laevigata* は光沢あつて平滑な意で、それはその葉に基づいて名づけたものであろう。そして属名の *Iris* は虹の意で、それは属中多くの花が美しいいろいろの色に咲くから、これを虹にたとえたものだ。

カキツバタの図

ムラサキ



『万葉集』に「託馬野つくまぬに生ふる紫草衣むらさきぎぬに染め、いまだ着ずして色に出いでけり」という歌があつて、この時分染料せんりようとして、ふつうに紫草むらさきぐさを使つていたことを示している。

ムラサキは日本の名で、紫草しそは中国の名である。根が紫色で、紫を染そめる染料となるので、この名がある。そしてその学名は「*Lithospermum erythrorhizon* Sieb. et Zucc. である。すなわちこの種名の *erythrorhizon* は、字からいえば赤根せきこんの意であるが、その意味からいえば紫根しこんの意と解せられる。属名の *Lithospermum* は石の種子しゆしの意で、この属の果実が、石のように堅かたい種子のように見えるから、それでこんな字を用いたものだ。

このムラサキは、山野向陽の草中に生じている宿根草で、根は肥厚ひこうしていて地中に直下し、単一、あるいは枝分えだわかれがしている。そしてその根皮こんひが、生時せいじは暗紫色あんししよくを呈ていしている。莖くきは直立して六〇〜九〇センチメートルに成長し、梢こざえはまばらに分枝ぶんししている。葉は披針形ひしんけいで尖り、無柄むへいで莖くきに互生ごせいし莖くきと共に毛ともがあり、葉面ようめんは白緑色はくりよくしよくを呈ていしている。梢枝しょうしには苞葉ほうようがあって、その苞腋ほうえきに一輪りんずつの小さい白花はくわが咲くから、緑色の草中くさなかににあつてちよつと目につく。花はなのもとの緑萼りよくがくは五尖裂せんれつし、花冠かかんは高盆形こうぼんけいで花面かめん五裂れつし輻状ふくじようをなしている。花筒内かとうないに五雄蕊ゆうずいと一雌蕊しずいとがあり、花柱かちゆうのもとに四耳しじをなした子房しぼうがある。

果実は小粒状の堅い分果で、灰色を呈して光沢があり、蒔けば能く生えるから、このムラサキを栽培することは、あえて難事ではない。ゆえに往時は、これを畑に作ったことがあつた。野生のものとはそうザラにはないから、染料に使うためには、是非ともこれを作らねばならぬ必要があつたのである。そしてこの紫根の上品は染料の方へ回し、下等品を薬用の方へ回したものだ。そうな。

昔は紫の色はみな紫根で染めた。これがすなわち、いわゆる紫根染めである。今はアニン染料に压倒せられて、紫根染めを見ることはきわめてまれとなつてゐる。私は先年、秋田県の花輪町の染め物屋に頼んで、絹地にこの紫根染めをしてもらった

が、なかなかゆかしい地色じいろができ、これを娘の羽織はおりに仕立てた。
 今それをアニリン染せんりよう料の紫に比くらぶれば、地色じいろが派手はででないか
 ら、玄人くろうとが見れば凝こっているが、素人しろうとの前では損しんをするわけ
 だ。私はさらに同染そめ物屋ものやで茜染あかねぞめもしてもらったが、茜染あかねぞ
 めの色は赤味あかみがかつたオレンジ色であるから、あまり引き立たな
 いが、なんとなく上品である。そしてこの紫根染しこんぞめも茜染あかねぞめも
 いろいろの模様もようを置くことができず、みな絞り染しぼぞめである。
 ムラサキと武蔵野むさしのはつきものであるが、今こん日武蔵野むさしのにはムラ
 サキは生じていない。しかし昔はそれがあつたものと見えて、
 「紫の一もとゆえに武蔵野の、草はみながら憐あわれとぞ見る」とい
 う有名な歌うたが遺のこっている。

ムラサキを採りたい人は、富士山の裾野すそのへ行けば、どこかで見つかるであろう。

ムラサキの図

スミレ

春の野といえは、すぐにスミレが連想せられる。実際スミレは春の野に咲く花であるが、しかし人家の庭には栽培してはいない。万葉歌の中にはスミレが出ているから、歌人かしんはこれに関心を持っていたことがわかる。すなわちその歌は、「春の野ぬにすみれ摘つみにと来し吾あれぞ、野ぬをなつかしみ一夜宿ひとよねにける」である。



スマイレは今、いろいろのスマイレの種類を総称するような名ともなつていれど、その中で特にスマイレというのは、スマイレ品類中一等優品で、濃のうししよく紫色の花を開く無むけいせい茎性せいそうせいしゆ叢生種の名であつて、これを学名では、*Viola mandshurica* W. Beck. といつている。満州〔中国の東北地方一帯〕にも産するので、それで *mandshurica* (「満州の」という意味) の種名がついている。

そして日本にはスマイレの品種が実に百種ほど(変種を入れるとこれ以上)もあつて、これがみなスマイレ属 *Viola* に属する。これによつてこれを観みれば、日本は実にスマイレ品種では世界の一等国といつてよい。

スマイレ、すなわち *Viola mandshurica* W. Beck. は宿根草しゆっこんそうで、

葉は一株かぶに叢生そうせいし、長葉柄ちようようへいがあり、葉面ようめんは長形で鈍鋸齒どんぎよしがある。葉と同じ株かぶから花茎かけいを抽ひいて花が咲くのだが、花は茎けいち頂ように一輪着りんつき、側方そくほうに向こうで開いている。花茎かけいにはかならずその途中に狭きようちよう長な苞ほうがほとんど対生たいせいして着ついており、花には緑色の五萼かくへん片と、色のある五花弁かべんと、五雄蕊ゆうずいと、一雌蕊しずいとがある。花茎かけいは一株から一、二本、肥こえた株では十本余りも出ることがある。そして濃紫色のうししよくの花が、いつも人目ひとめを惹ひくのである。

五片へんの花弁中、下方の一花弁には、後ろうしに突き出た距きよと称するものを持つている。元来がんらい、このスミレの花は虫媒花ちゆうばいかなれども、今日こんにちではたいていのスミレ類は果実みが稔みのらない。そして花の済す

んだ後に、微小なる閉鎖花がしきりに生じて自家受精をなし、能く果実ができる特性がある。ゆえにスミレの美花はまったくむだに咲いているわけだ。しかしここにいう *Viola mandshurica* W. Beck. のスミレは、その常花の後で能く果実の稔っているものを見かけることがある。このスミレもその後では、しきりと閉鎖花によつての果実が続々とできるのである。

いったい、スミレの花は昆虫に対し、とても巧妙にできている。まず花は側方に向いているので、昆虫が来て止まるに都合がよい。花弁は上の方に二片、両側に二片、下の方に一片がある。そしてこの一片の後方に一つの距のあることは、前に記したとおりである。

花が開いていると、たちまち蜜蜂みつばちのごとき昆虫の訪問がある。それは花の後ろうしにある距きよの中の蜜みつを吸いに来たお客様である。さつそく自分の頭を花中へ突き入れる。そしてその嘴くちばしを距の中へ突き込むと、その距きよの中に二つの梃子てこのようなものが出ていてそれに触ふれる。この梃子てこのようなものは、五雄蕊ゆうずい中の下の二雄蕊ゆうずいから突き出たもので、昆虫の嘴くちばしがこれに触ふれてそれを動かすために、雄蕊ゆうずいの葯やくが動き、その葯やくからさらさらとした油氣あぶらけのない花粉が落ちて来て、昆虫の毛のある頭へ降りかかる。

そしてこの昆虫がよい加減蜜かげんみつを吸うたうえは、頭に花粉をつけたままこの花を辞じし去つて他の花へ行く。そして同じく花中へ頭を突き込む。その時、前の花から頭へつけて来た花粉を今度の花

の花柱かちゆう、それはちょうど昆虫の頭のところへ出て来ている花柱の末端まったんの柱頭ちゆうとうへつける。この柱頭には粘液ねんえきが出ていて、持つて来た花粉がそれに粘着ねんちやくする。花粉が粘着すると、さつそく花粉管が花粉より延び出で、花柱の中を通つて子房しぼうの中の卵らん子しに達し、それから卵子が生長して種子となるが、それと同時に子房は成熟して果実となるのである。

実にスミレ類は、このように昆虫とは縁の深い関係になつているのである。しかしかく昆虫に努力させても、花が果実を結ばず無駄咲むだざききをしているものが多いのは、まことにもつたいなき次第しだいである。それはちょうど水仙すいせんの花、ヒガンバナの花などと同じ趣おもむきである。

スミレの葉は花後かごに出るものは、だんだんとその大きさを増し、形も長三角形となつて花の時の葉とはだいぶ形が違つてくる。

スミレの果実は三殻かくへん片かへんからなつているので、それが開裂かかれつするとまつたく三つの殻片かくへんに分かれる。そしてその各殻片内かくへんないに二列ならに並ぶ種子を持つていゝ。殻片かくへんが開いたその際は、その種子があたかも舟に乗つたように並んでいゝのだが、その殻片かくへんがだんだん乾かわくと、その両縁りょうえんが内方うちむかひに向こうて収縮しゅうしゆく、すなわち押し狭せまめられ、ついにその種子を圧迫あつぱくして急に押し出し、それを遠くへ飛ばすのである。なんの必要があつてかく飛ばすのか、それは広く遠近の地面へ苗なえを生はえさせんがためなのである。

またそれのみならず、その種子には肉阜にくぶ（カルンクル）と呼ぶ

軟肉なんにくが着ついていて、これが蟻ありの食物になるものだから、その地面こころに転ころがつている種子を蟻ありが見つけると、みなそれをわが巢すに運び入れ、すなわちその軟肉なんにくを食い、その堅かたい種子をばもはや不用として巢の外へ出し捨てるのである。この出された種子は、その巢の辺で発芽はつがするか、あるいは雨水あまみずに流され、あるいは風に飛んで、その落ちつく先で発芽する。かくてそのスミレがここに繁殖はんしょくすることになる。このように、この肉阜にくふが着ついている種子はクサノオウ、キケマン、タケニグサなどのものもみなそうで、いずれもみな蟻ありへのごちそうを持っているわけだ。かく植物界のことに気をつけると、なかなかおもしろい事柄ことがらが見いだされるのである。

春いちはやく紫の花が咲くスミレにツボスミレ（今こんにち日の植物界ではこれをタチツボスミレとっていれど、これは畢ひつきよう竟不用な名でツボスミレが昔からの本名である）というものがある。このツボスミレもはやく歌人の目にとまり、万葉の歌に

山ぶきの咲きたる野の辺べのつぼすみれ

この春の雨にさかりなりけり

茅花つばな抜く浅茅あさぢが原のつぼすみれ

いまさかりなり吾あが恋おもふらくは

がある。このツボスミレは前記のとおり紫花の咲くスミレで、

他のスミレよりは早く開花する。野^の辺^べではこのツボスミレが最も早く咲き、且^かつたくさんに咲くので、そこで歌人の心を惹^ひきつけたのであろう。ツボスミレは壺^{つぼ}（内^{なかに}庭^わのこと）スミレ、すなわち庭スミレの意である。花の後^{うし}ろの距^{きよ}が壺^{つぼ}の形をしているからツボスミレという、という古い説はなんら取るに足^たらない僻^{ひがごと}事^{こと}である。

昔から董の字をスミレだとしているのは、このうえもない大間^{じてん}違いで、董はなんらスミレとは関係はない。いくら中国の字典^{じてん}を引いて見ても、董をスミレとする解説はいっこうにない。昔の日本の学者が何に戸^{とまど}惑^どうたか、これをスミレだというのはばからしいことである。それを昔から今^{こんにち}日に至るまでのいっさいの日本

人が、古い一人の学者にそうまんちやく瞞ま着ちやくせられていたのは、そのおめでたき加減かげん、マーなんということだろう。

葶きん藶きんという植物は元来がんらい、圃はたけに作る蔬菜そさいの名であつて、また葶きん菜さいとも、旱葶かんきんとも、旱芹かんきんともいわれている。中国でも作つ

ていれば、また朝鮮にも栽培せられて食用にしている。植物学上

の所属はカラカサバナ科で、その学名は *Apium graveolens* L. であ

る。これは西洋でも食用のため作られていて、かのセロリ (Celer

セ) がそれである。今日こんにちではこの和名わめいをオランダミツバという

から、すなわち葶たし藶しは確かにオランダミツバとせねばならず、そ

れがけつしてスミレではないことを、だれでも承知していなければ

ばならない。昔文禄ぶんろく・慶長けいちょうの役の時えき、加藤清正きよまさが朝鮮か

らこの種子を持つて来たというので、このオランダミツバに昔キヨマサニンジンの名があつた。

パンジーはスマレ属の一種で、三色^{さんしき}スマレと呼ばれる。すなわち、一花に三つの色があるというのである。

スイート・バイオレットはニオイスマレで園芸品となつてゐる。

通常紫色の花が咲き、香^{にお}いが高いから、香^{こう}気を好^すく西洋人に大いに貴^{とうと}ばれてゐる。いつたい日本人は花の香^{にお}いに冷^{れい}淡^{たん}で、あまり

興味を惹^ひかないようだが、西洋人と中国人とはこれに反して非常に花^か香^{こう}を尊^{そん}重^{ちゆう}する。かの素馨^{そけい}〔ジャスミン〕などは大いに中

国人に好かれる花の一つで、市場で売つており、薔薇^{ばら}の玫瑰^{まいかい}

(日本の学者はハマナシ、すなわち誤つていうハマナスを玫瑰^{まいかい})

としていれど、それはむろん誤りである）も同国人に貴とうとばれ、その花に佳香かこうがあるので茶に入れられる。ゆえに「Tea rose」の名がある。

スマイレの図

サクラソウ

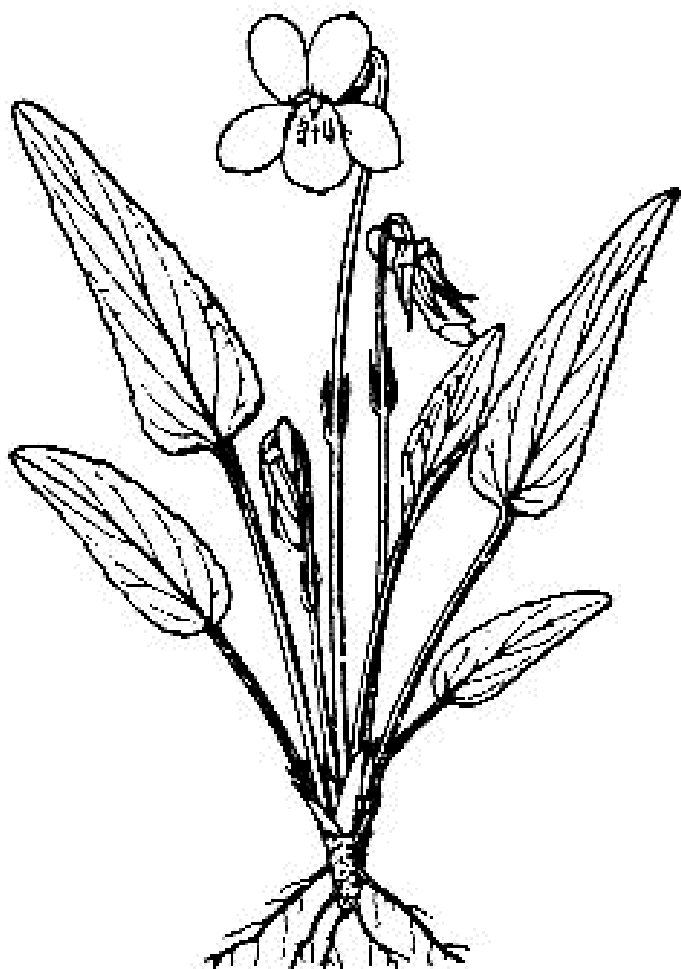
サクラソウはよく人の知っている花草かそうで、どんな人にでも愛せられる。またその名もよくつけたもので、まことにその花にふさわしい名称である。通常桜草と書いてあるが、これはもとより中国名すなわち漢名ではなく、単にサクラソウを漢字で書いたもの

たるにすぎなく、サクラソウには中国名はない。

そしてその学名は *Primula Sieboldi* Morren forma *spontanea* Takeda であるが、この学名の中にある forma は品の義でその変わり品を示しており、*spontanea* は自生じせいの意、種名の *Sieboldi* はかの有名なシーボルトの人名であり、属名の *Primula* は最初の義で、畢ひ竟つぎよう 花の早咲はやざいきを意味したものである。

サクラソウは平野に生ずるが、また山の高原地にも見られる。

しかしそう普遍ふへんてき的にどこにもあるものではない。東京付近ではかの田島たじまの原にたくさん咲くので、そこは天然記念物に指定せられてゐる。また信州〔長野県〕軽井沢の原にもあり、また遠く九州豊後〔大分県〕の日田ひた地方にもあるといわれている。



宿根草しゅつこんそうで、これを人家の庭に栽うえても能く育ち、毎年花が

咲いてかわいらしい。葉は一株かぶから二、三枚ほど出でて毛がある。

長い葉柄ようへいを具え、葉面ようめんは楕円形だえんけいで重鋸齒じゅうきよしがあり、葉質ようしつ

は軟らかくて皺しわがある。四月ごろ花茎かけいが葉よりは高く立ち、茎けいち

頂ように繖形さんけいをなして小梗しょうこうある数花が咲く。花下かかに五裂れつせる

緑萼りよくがくがあり、花冠かかんは高盆形こうぼんけいで下は花筒かとうとなり、平開へいかいせる

花面かめんは五片へんに分かれ、各片いただきの頂れつは二裂して、その状すこぶる

サクラの花に彷彿ほうふつしている。花の直径はおよそ二センチメートル

ルばかりで、花色は紅紫色こうししよくであるが、たまに白花のものに出逢であ

う。花筒内かとうには五雄蕊ゆうずいと一雌蕊しずいとがあつて、雌蕊のもとに一子し

房ぼうがある。

このサクラソウの園芸的培養品にはおよそ二、三百の変わり品があつて、みなこれまでの熱心な園芸家により、苦心して作り出されたものである。これは世界中に類のないもので、大いにわが邦の誇りとするに足る花である。

ここに最も興味のあることは、このサクラソウ（同属の他の種も同様）の花には二様の差があつて、それが株によつて異なつてゐる事実である。すなわち一方の花は五つの雄蕊が花筒の入口直下についていて、その雌蕊の花柱は短い。また一方の花は雄蕊が花筒の中途についていて、その花柱は長く花筒の口に達している。すなわち前者は高雄蕊短花柱の花であり、後者は低雄蕊長花柱の花である。

ゆえにこれらの花は自分の花粉を自分の柱頭ちゆうとうに伝うことができず、是非ぜひともそれを持つてきてくれる何者かに依頼いらいせねばならないように、自然がそう鉄則てつそくを設けてもういる。まことに自由な花のようだが、実はそれがそう不自由でないのはおもしろいことではないか。なんとすれば、そこには花粉の橋渡はしわたし役を勤つとめるものがあつて、断たえずこの花を訪おとずれるからである。そしてその訪問者は蝶々ちようちようである。花の上を飛び回まわっている蝶々は、とぎどき花に止まつて仲人なこうどとなつているのである。

今、蝶ちようが来て高雄蕊低花柱こうゆうずい、かちゆうの花に止まつたとする。すなわちその長い嘴くちばしをさつそく花に差し込んで、花底かていの蜜みつを吸う。その時その嘴くちばしに高雄蕊こうゆうずいの花粉をつける。次にこの蝶ちようが低雄蕊高ていゆうずい、こうか

花柱ちゆうの花に行き、その嘴くちばしを花に差し込む。そうすると低雄蕊ていゆうざいの花粉がその嘴くちばしに付着するばかりでなく、前の花の高雄蕊たかゆうざいからつけて来た花粉を高花柱こうかちゆうの柱頭ちゆうとうにつける。また右の低雄蕊ていゆうざいの花からその低雄蕊ていゆうざいの花粉をつけて来た蝶は、その花粉を低花柱ていかちゆうの柱頭ちゆうとうにつける。

このようにその花の受精するのは、どうしても他の花から花粉を持って来てもらわぬ限りそれができないから、自分の花粉で自分の花の受精作用はまったく不可能である。他花たかの花粉で、自分の花の受精作用を行わんがために、このサクラソウの花は雄蕊ゆうざいの位置に上下があり、雌蕊しすいの花柱に長短を生じさせているのである。天然てんねんの細工さいいくは流々りゅうりゅう、まことに巧妙こうみょうといふべきでは

ないか。こうなると他家結婚ができ、したがって強力な種子が生じ、子孫繁殖には最も有利である。

植物でも自家受精、すなわち自家結婚だと自然種子が弱いので、そこで他家受精すなわち他家結婚して強^{きよう}壯^{そう}な種子を作ろうというのだ。植物でこんな工夫^{くふう}をしているのはまことに感嘆^{かんとん}に値^{あた}する。今それを人間にたとうれば、同族結婚を避^さけて他族結婚をしたこととなる。實際^{じつげん}縁^{えん}の近い人同士の結婚はあまり有利でなく、これに反して縁の遠い人同士の結婚が有利である。それゆえイトコ同士の結婚などはあまり褒^ほむべきものではなく、強^{きよう}健^{けん}な子供を欲^ほしいと思えば、縁類でない他の家から嫁をもらうべきである。前述のとおりサクラソウでさえ、自家結婚を避けて他家結婚

を歡迎かんげいしているではないか。言い古した言葉だが、「人にして草に如しかざるべけんや」である。

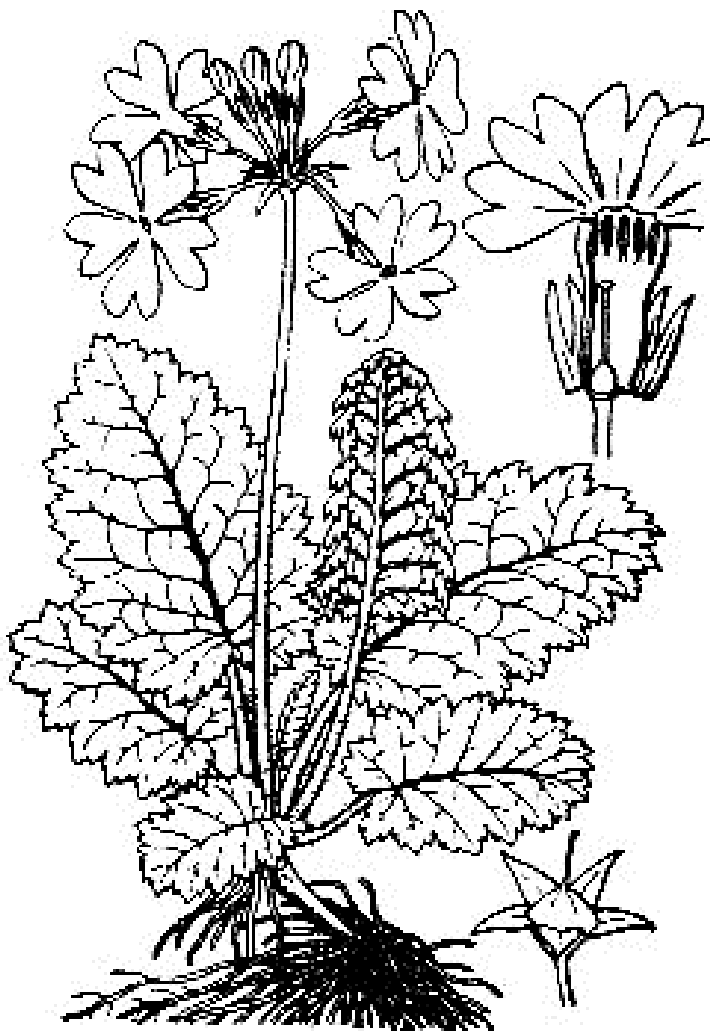
日本にはサクラソウ属の種類がおよそ三十種ばかりもあるが、その中で一番りっぱで大きな形のものにはクリンソウで、これは世界中でも有名なものである。温室内にあるサクラソウ類には中国産のものも多く、シナサクラソウ、オトメザクラ、ハルコザクラなどはその名が高い。とにかく、観賞花としてサクラソウの類は、
上じょう乗じょうなものである。

サクラソウの図

ヒマワリ

ヒマワリは一名ヒグルマ、一名ニチリンソウ、一名ヒユウガア
オイと呼ばれ、アメリカ合衆国の原産であるが、はやくに広く世
界に広まり、諸国で栽培さいばいせられている。そしてわが邦くにへはけだ
し、昔中国からそれを伝えたものである。今はわが国内でもあ
まねく諸州で作られている。通常は観賞花草として栽うえられてい
るばかりで、その実を食らい、あるいはそれから油しほを搾しぼるなどの
ことはやっていないようだ。つまり有用植物としては顧かえりみられな
いでいる。

世人せいじんは一般に、ヒマワリの花が日に向こうで回まわるといふことを
信じているが、それはまったく誤りであつた。先年私が初めてこ



れを看破し、かんぱ「日まわり日に回らず」と題して当時の新聞や雑誌などに書いたことがあつた。つまりヒマワリの花は側方に傾いて咲いてはいれど、日に向こうてはいっこうに動かないことは、實地についてヒマワリの花を朝から夕まで見つめていれば、すぐにその真相がわかり、まったくくたびれもうけにおわるほかはない。

このヒマワリの花が日光を追うて回るといふことは、もと中国の書物から来たものだ。それは『秘伝花鏡』ひでんかきようという書物に次のとおり書いてある。すなわち、

「向日葵、ひまわり每幹の頂上まいかん ちようじように只一花あり、ただいっか黄弁大心、おうべんたいしん其の形盤ばんの如く、ごと太陽に随したがいて回轉す、も如し日のぼが東に昇れば則ち花は東に朝むかう、日なかが天に中すれば則ち花直ちに上に朝むかう、日しずが西に沈

めば則ち花は西に朝う」

である。これが、ヒマワリの日に向こうで回転する、という中国での説である。

ヒマワリはキク科に属する一年生草本で、その学名を *Helianthus annuus* L. と称し、俗に Sunflower といわれている。すなわち太陽花、すなわち日輪花である。右属名の *Helianthus* は、これもまた同じく Sunflower と同義で日輪花を意味し、種名の *annuus* は一年生植物の義である。なぜこの花を日輪、すなわち太陽にたとえたかという、あの大きな黄色の花盤を太陽の面とし、その周辺に射出している舌状花弁を、その光線に擬えたものだ。中央に広く陣取って並んでいる管状小花は、その平坦な

花托面かたくめんを覆い埋めおお、下に下位子房かいしぼうを具えそな、花冠かかんは管状をなして、その口五裂れつし、そして管状内には集藥しゅうやく的に連合した五雄蕊ゆうずいがあり、中央に一本の花柱かちゅうがあつて右の藥内やくを通り、その柱頭ちゅうとうは二岐きしている。花の後のちには子房しぼうが成熟して果実となり、果中に一種子があり、種皮の中には二子葉しよくを有する胚はいがある。春にこの種子を播まげば能く生ずる。はじめ緑色の二枚の子葉しよくが開展し、その中央から茎くきが出て葉を着つける。そしてその胚には油あぶらを含んで

いる。

茎くきは巨大で、高さが二メートル以上にも達し、あたかも棒のようである。

葉は広くて、長葉柄ちようようへいを具えそな、茎に互生ごせいしており、広卵形こうらんけい

で三大脈を有して、葉縁ようえんに粗鋸齒そぎよしがあり、茎くきと共にざらついている。茎くきの頂いただきに一花あるものもあれば、また分枝ぶんししてその各枝端したんに一輪りんずつの花を着つけるものもある。また品種によつて花に大小があり、その大なるものは直径およそ二十センチメートルばかりもある。

このヒマワリの花は、他のキク科植物と同じく集合花で、そのおのおのを学問上フロレットで小花と称する。すなわち、この小花が集まつて一輪の花を形作っている。こんな集合花を、植物学上で頭と状花うじょうかと称する。キク科の花はいずれもみな頭状花である。つまり寄り合よい世帯せたい、すなわち一の社会を組み立てている花である。そしてこの寄り合よい世帯せたいには、分業が行われてたいへんにこの花に

利益をもたらし、それがためにたくさんな種子がよく稔みのることになっている。

ヒマワリの花は虫媒花である。昆虫が花の蜜みつを吸すいに来て、花盤面かばんめんにあるたくさんな小花の上を這はい回ると、花が一度に受精じせいする巧こう妙みょうな仕組みになっている。これは他のキク科植物も同様である。

右に分業といったが、すなわち、花盤上かばんにある小花はもつぱら生殖つかさどを司り、周辺にある舌ぜつじょう状小花は、昆虫に対する目印めじるしの看板かんばんと併あわせて生殖を担たん当とうしている。こんな分業などが能く行われ、且かつ受精が巧こう妙みょうに行きわたり、また種子の分布ぶんぷも巧たくみなので、キク科植物は地球上で最も進歩発達した花である、と評

働せられている。そしてキク科植物は、他のいずれの科のものよりも勝つてたくさんな種類を含み、はなはだ優勢である。

ヒマワリの姉妹品しまいひんにキクイモがあつて同属に列する。その学名を *Helianthus tuberosus* L. (この種名は塊茎かいけいを有する意) と称し、俗に Girasole または Jerusalem artichoke と呼び、やはりアメリカ合衆国ならびにカナダがその原産地である。地中にジャガイモばれいしょ (馬鈴薯ばれいしょ というは大間違い) のような塊茎かいけい が生じて食用になるのだが、それにまつたく澱粉でんぷん はなく、ただイヌリン (ゴボウと同様) があるのみである。味は淡白たんぱく であつて美味うま くないから、だれも食料として歓迎かんげい しない。しかれども方法をもつてすれば、砂糖さとう が製せられるから捨てたものではない。

ヒマワリの図

ユリ

中国に百合という一種のユリがあつて、白い花が咲く。これは中国の特産であつて、日本には見ることがない。そして百合は、^{ひと}独りこの白花ユリ (*Lilium* sp. 種名未詳) の専有する特名である。百合とは、その地下の球根 (植物学上でいえば鱗^{りんけい}茎) に多くの鱗^{りんぺん}片があつて層々^{そうそう}と重なっているから、それでそう百合と
いうとのことである。

ところが日本の諸学者はだれでも百合はササユリ (学名は *Lilium*



um Makinoi Koidz.) であるといっている。しかしササユリは、日本の特産で中国には産しないから、もとよりこのユリに中国名の百合の名があるわけではない。この一点をもつてしても、ササユリが百合ではないことが判る^{わか}。そして日本ではなお百合をユリの総名のように思っており、ユリといえばよく百合と書いているが、それはまったく間違っている。

日本産のユリには多くの種類があれども、一つも百合に当たるものはない。ゆえに百合を、日本のいずれのユリにも、それに対して用いてはならない。世間^{せけん}の女の子によく百合子があるが、これは正しい書き方ではない。ゆえにユリコといたければ、仮名^{かな}でユリ子と書けば問題はないことになる。

右のような次第しだいだから、実を言えば、百合の字面を日本のユリからは追つい放ほうすべきもので、ユリの名はその語原がまつたく不明である。また昔はユリをサイといったらしいが、これもその語原がわからない。しかしユリの想像語原では、ユリの茎くきが高く延のびて重たげに花が咲き、それに風が当たるとその花が揺ゆれるから、それでユリというのだ、といっていることがある。

ユリの諸種はみな宿根草しゅっこんそうである。地下に鱗茎りんけい（俗にいう球根）があつて、これが生命の源みなもととなつてゐる。すなわち茎葉は枯かれても、この部はいつまでも生きていて死なない。

右、鱗茎りんけいは白色、あるいは黄色の鱗片りんぺんが相重あいかさなつて成なつてゐるが、この鱗片りんぺんは実は葉の変形したものである。そして地

中で養分を貯たくわえている役目をしているから、それで多肉たにくとなり、多量の澱粉でんぷんを含んでいる御蔵おくらをなしているが、それを人が食用とするのである。右の鱗片が相擁あいようして塊かたまり、球をなしているその球の下に叢生そうせいして鬚ひげじよう状をなしているものが、ユリの本当の根である。そしてなお鱗茎りんけいから出ている一本の茎くきにも、その地中部には真の根が横おうしゆつ出して生はえている。

茎くきは鱗茎りんけい、すなわち球根から一本出いでて直立し、狭長きやうちような葉がたくさんそれに互生ごせいしている。茎くきの梢こずえは多くは分枝ぶんしして花を着つけているが、花はみな美しく香気かうきのあるものが少くない。そして花は上向きうわむに咲くものもあれば、横向きに咲くものもあり、また下向きに咲くものもあつて、みな小梗しょうこうを有している。

花は花蓋かがい（萼がく、花卉同様な姿をしていているものを、便宜べんぎのため植物学上では花蓋かがいと呼んでいる）が六片ぺんあるが、それが内外二列をなしており、その外列の三片が萼がく片へんであり、内列の三片が花卉である。そしてそのもとの方の内面には、よく蜜みつが分泌ぶんぴつせられているのが見られる。六本の雄蕊ゆうずいがあつて、おのおのが花蓋かがい片へんの前に立つており、長い花糸かしの先にはブラブラと動く葯やくがあつて、たくさんな花粉を出している。この花粉には色があつて、それが着物つに着くと、なかなかその色が落ちないので困る。ゆえに、人によりユリの花を嫌きらうことがある。

花の底には一つの緑色の子房しぼうが立つており、その頂いただきに一本の長い花柱かちゆうがあり、その末端まつたんはすなわち柱頭ちゆうとうで三耳形さんじけいを呈てい

し、粘滑ねんかつで花粉を受けると都合つごうよくできている。右のように花の中にある子房しぼうをば、植物学上では上位子房じょういしぼうといっている。ユリの花は著しい虫媒花ちゅうばいかで、主として蝶々ちようちようが花を目当てめあに頻々ひんぴんと訪問する常得意じょうとくいである。それで美麗な花色びれいかしよくが虫を呼ぶ看板かんばんとなっており、その花香かこうもまた虫を誘うさそ一つの手引きてびを務めつとている。訪問客、すなわち蝶々はその長い嘴くちばしを花中へ差し込み、花蓋かがいのもとの方の内面に分泌ぶんびつしている蜜みつを吸うすのである。その時、その虫の体も嘴くちばしも薬やくに触れて、その花粉を体や嘴くちばしに着つける。そして他の花へ飛びあるいた時、その着つけて来た花粉を粘ねんち着やくする雌蕊しすいの柱頭ちゆうとうへ、知らず知らず着つけるのである。すなわち蝶と花とが、利益の交換こうかんをやっているわけだ。こうしてユ

リは子房しほうの中の卵子らんしが孕みはら、のち種子たねことなつて、子孫を継ぐつ基もとをなすのである。

たくさんあるユリの種類の中で、最もふつうで人に知られてい
るものが、オニユリである。これは中国にも産し、卷丹けんたんの名が
ある。それは花蓋片かがいへんが反卷はんかんし、且か丹あかいからである。このオ
ニユリの球根、すなわち鱗茎りんけいは白色で食用になるのであるが、
少しく苦味にがみがある。このユリの特徴とくちようは葉腋ようえきに珠芽しゆがが生ずる
ことである。これが地に落ちれば、そこに仔苗しびようが生ずるから繁は
殖んさすには都合つごうがよい。

またこのオニユリは往々圃おうおうはたけに作つてあるが、なお諸処あちに野生やせい
もある。おもしろいことには東京地方へ旅行すると、農家の大き

な藁葺屋根の高い棟にオニユリが幾株も生えて花を咲かせている風情である。オニユリの花は通常一重であるが、時に八重咲きのものが見られ、これを八重天蓋と称するが、テンガイユリはオニユリの一名である。

ヤマユリはりっぱなユリであつて、関東諸国に野生し、また人家にも作られている。大きな花が咲き、その満開の時はよく香う。その花蓋片は元来は白色だが、片面に褐赤色の斑点がある。花蓋片の中央紅色の深いものはベニスジュリと唱え珍重せられるが、これは園芸的の品である。ハクオウというのは、花蓋片が白くて斑点なく中央に黄筋の通つていもので、これも園芸品である。

ヤマユリの球根は、食用として上じょう乗じょうなものである。ゆえに古いにしえより、料理ユリの名がある。またその産地に基もとづいてヨシノユリ、ホウライジュリ、エイザンユリ、ウキシマユリの名がある。元がんらい来、ヤマユリの名は、ササユリの一名であるところのヤマユリの名と重複するので、今のヤマユリは、これをヨシノユリか、あるいはリヨウリユリと呼んだならきわめてよいと思われる。ヤマユリの名は、なんとなく土つちくさ臭い感じがして、いっこうに上品に聞こえない。

このヤマユリは日本の特産で、中国にはないから、したがって中国名はない。日本の学者は『汝南圃史じよなんほし』という中国の書物にある天香百合をヤマユリだとしていれど、それはむろん誤りである。

ヤマユリは、輸出向きには一等重要なユリである。従来非常にたくさんなこのユリ根が外国に輸出せられたが、これからも漸次ざんじにその盛せい況きようを見るに至るであろう。

ササユリは、関西諸州の山地には多く野生やせいしているが、関東地方には絶たえてない。しかし関西の地でも、あまり人家には作つていない。茎くきは九〇〜一二〇センチメートルに成長して立ち、なんとなく上品な色を呈ていし、花も淡たん紅こう色しよくで、すこぶる優雅ゆうがである。前記のとおり、このユリにもヤマユリの名があり、またサユリという名もある。サユリはサツキユリの略されたもので、それは早さ月つき（旧暦の五月、今こんにち日ちでは六月に当たる）のころに花が咲くからそうなのである。

カノコユリは、きわめて華美な花が咲く。花色紅赤色で、濃紅色の点がある。日本のユリ中、最も優れた花色を呈している。このユリは四国、九州には野生があつて、いつも断崖の所に生じている。ゆえにその莖は向こうに突き出で、あたかも釣り竿を差し出したようになっており、その先に花が下向いて咲いている。ゆえに土佐〔高知県〕では、これをタキユリというのだが、同国では断崖をタキと称するからである。変種に白花の品と淡紅色の品とがあつて、その淡紅色のものをアケボノユリ（新称）といい、白花のものをシラタマユリと呼んでいる。これは共に園芸品である。

テツポウユリは沖繩方面の原産で、筒の形をした純白の花が横

向きに咲き、香気こうきが高い。このユリを筑前ちくぜん〔福岡県北東部〕では、タカサゴと呼ぶことが書物に出ている。そしてこのテツポウユリは、輸出ユリとして著名ちよめいなもので、その球根が大量に外国に出て行く。

サクユリは、伊豆七島いずしちとうにおける八丈島はちじょうじまの南にある小島青ヶ島の原産で、日本のユリ中、最も巨大なものである。花は純白で香気こうき強く、実にみごとなユリで、この属中の王様である。球根もきわめて大きく、鱗片りんぺんも大形で肉厚く黄色を呈してい、食用ユリとしても上位を占むしるものといつてよろしい。

スカシユリは、ふつうに栽培さいばいして花を咲かせていて、その花色には赤、黄、樺かば〔赤みを帯びた黄色〕などがある。花は上向き

に咲き、花蓋片かがいへんのもとの方がたがいすに透すいているので、スカシユリの名がある。諸国の海岸に野生やせいしているユリに、ソトガハマユリとも、テンモクユリとも、ハマユリとも、またイワトユリともいう樺色花かばいろかのユリがあるが、これは右スカシユリかばいろかの原種である。東京付近では房州ぼうしゅう〔千葉県千葉県の南部〕、相州そうしゅう〔神奈川県〕、豆州ずしゅう〔伊豆半島と伊豆七島〕へ行けば得られる。

コオニユリは、オニユリに似て小さいといふのでこの名があるが、一にスゲユリともいわれる。それは葉が狭きょうちゆう長ちゆうだからである。山地向陽こうようの草中に野生し、オニユリのごとき丹赤色たんせきしよくの花が咲き、暗褐色あんかつしよくの斑点はんてんがある。球根は食用によろしい。

ヒメユリはその名の示すごとく可憐かれんなユリである。関西地方か

ら九州にかけて山野に野生があるが、そう多くはない。茎は六〇〜九〇センチメートルに立ち、狭葉を互生し、梢に少数の枝を分ちちて、きわめて美しい真赤色の花が上向きに咲く。この一変種に、コヒメユリというのがある。茎は細長く花は茎末に一、二輪咲く。この品は野生はなく、まったく園芸品である。

クルマユリは、その葉が車輪状をなしているので、この名がある。花は茎梢に一花ないし数花點頭して咲き、反卷せる花蓋面に暗点がある。高山植物の一つであるが、羽前〔山形県〕の飛島に生えているのは珍しいことである。

右のほかヒメサユリ、タケシマユリ、タツタユリ、ハカタユリ、カサユリなどの種類がある。ウバユリというのは異彩を放ったユ

りで、もとはユリ属 (Lilium) に入れてあつたが、私はこれをユリ属から独立させて、Cardiocrinum なる別属のものとしている。その葉はユリの諸種とは違い、広闊こうかつなる心臟形で網もうじょうみやく状脈を有し、花は一茎に数花横向きに開き、緑りよくはくしよく白しろ色で左右相称状になつている。鱗りんけい茎けいの鱗りんぺん片ぺんもきわめて少なく、花が咲くとその鱗りんけい茎けいは腐死ふしし、その側がわに一、二の仔しびよう苗めいを残すにすぎない特状がある。この属のもの日本に二種、一はウバユリ、二はオオウバユリである。インド・ヒマラヤ山地方に産する偉大なウバユリ、すなわちヒマラヤウバユリもこの属に属する。

輸出ユリとしては日本が第一で、年々たくさんな球根が海外へ出ていたが、戦争で頓挫とんざしていたけれども、これからふたたび、

前日のような盛せい況きやうを見るであろうことは請うけ合あいで、わが邦くに園芸界のために、大おほいに祝しゆくしてよろしい。その輸出ユリの第一はヤマユリ、次がテツポウユリ、次がカノコユリという順序だろう。これらのユリは、日本でなるべくその球根を大きくなるように培ばいよう養ようして、その球根を輸出する。先方ではそれをを一年作つて、さらにその大きさを増さしめ、そして次年じねんに勢いきおいよく花を咲かせてその花を賞しょう翫がんする。花が咲いた後、弱つた球根は捨かてえりて顧かみえりない。

ゆえに年々ねんねん歳さい々さい日本から断たえず輸入する必要があるの
で、この貿易は向こうの人の花の嗜好しこうが変かわらぬ以上い上じやういじやうつまでも
続つくわけで、日本はまことにまたと得えがたい良よい得え意い先せんを持もつた

ものだ。また、良いユリをも持ったものだ。万歳万歳。

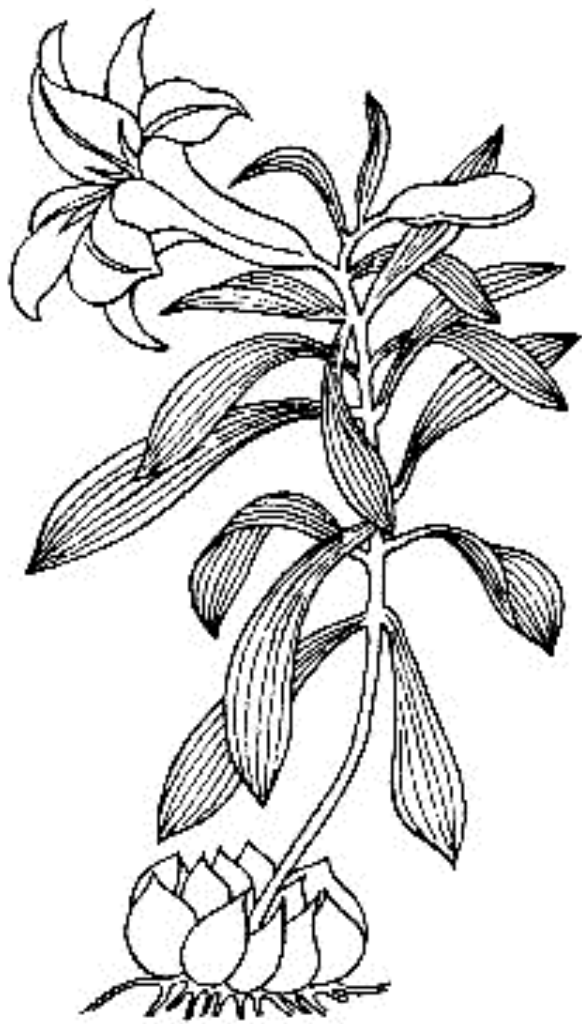
ユリの図

ハナシヨウブ

ハナシヨウブは世界の Iris 属中の王様で、これがわが邦の特産植物ときているから、大いに鼻を高くしてよい。アメリカでは、花シヨウブ会ができてきているほどなのであるが、その本国のわが邦では、たいした会もないのはまことに恥ずかしい次第であるから、大いに奮起して、世界に負けないようなハナシヨウブ学会を設立すべきである、と私は提唱するに躊躇しない。

Lis 属中の各種中で、ハナシヨウブほど一種中（ワンスピーシーズ中）に園芸上の変わり品を有しているものは、世界中に一つもない。これは独り^{ひと}日本の持つ特長である。なんとなれば、ハナシヨウブを原産する国は、日本よりほかにはないからである。実にハナシヨウブの品種は、何百通りもあるではないか。

ハナシヨウブは、まったく世界に誇^{ほこ}るべき花であるがゆえに、どこか適当な地を選んで一大花シヨウブ園を設計し、少なくとも十万平方米メートルぐらいある園を設^{もう}けて、各種類を網羅^{もうら}するハナシヨウブを栽^うえ、大いに西洋人をもビックリさすべきである。いまや観光団が来るとい^やう矢先^{やさき}に、こんな大規模のハナシヨウブ園を新設するのは、このうえもない意義がある。従来、東京付近にあ



る堀切ほりきり、四ツ目などのハナシヨウブ園は、みな構かまえが小さくて問題にならぬ。

花シヨウブは、元がんらい来、わが邦くにの山野に自生している野のハナシヨウブがもとで、それを栽培に栽培を重ねて生まれしめたものである。ゆえに、このノハナシヨウブは栽培ハナシヨウブの親である。昔かの岩いわしろ代〔福島県の西部〕の安積あさかの沼のハナシヨウブを採とり来つて、園芸植物化せしめたといわれるが、それはたぶん本当であろう。

しかしハナガツミというものがその原種だというのは、妄もうせつ説である。私には信ずる。そしてその歌の、「陸奥みちのくのあさかの沼の花がつつみかつ見る人に恋やわたらむ」の花ガツミはマコモ、すな

わち真菰まごもの花を指したもので、なんらこのハナシヨウブとは関係はないが、園養えんやうのハナシヨウブを美化びかせんがために、強しいてこの歌を引用し、付会ふかいしているのは笑しょうし止しの至りである。

ハナシヨウブの花は千差万別せんさばんべつ、数百品もあるであろう。かつて三好みやしまなぶ学博士が大学にいる間に、『花菖蒲図譜はなしょうぶずふ』を著して公にしたが、まことに篤志とくしの至りであるといつてよい。われらはこの図譜ずふによつて、明治末年前後のハナシヨウブ花品かひんを窺うかがうことができるわけだ。そしてハナシヨウブを花菖蒲と書くのは、実は不正な書きかたで、シヨウブは菖蒲から書いた名ではあれど、シヨウブはけつして菖蒲ではない。

ハナシヨウブの花は、その構造はアヤメやカキツバタと少しも

変わりはない。ただ花の器官に大小広狭、ならびに色彩の
 違いがあるばかりだ。すなわち最外の大きな三片が萼片で、
 次にある狭き三片が花弁である。三つの雄蕊は幅広く花柱枝
 の下に隠れて、その葯は黄色を呈しており、中央の一花柱は大
 きな三枝に岐かれて開き、その末端に柱頭があり、虫媒
 花であるこの花に来る蝶々が、この柱頭へ花粉を着けてく
 れる。花下に緑色の一子房があつて、直立し花を戴いている。子
 房には小柄があり、その下に大きな二枚の鞘苞があつて
 花を擁している。

ハナシヨウブは、ふつうに水ある泥地に作つてあるが、しかし
 水なき畑に栽えても、能くできて花が咲く。宿根性草本で、

地下茎は横臥している。茎は直立し少数の茎葉を互生し、初夏の候、頂に派手やかな大花が咲く。葉は直立せる剣状で白緑色を呈し、基部は葉鞘をもつて左右に相抱き、葉面の中央には隆起せる葉脈が現れている。花が了わると果実ができ、熟してそれが開裂すると、中の褐色種子が出る。

ハナシヨウブとは花の咲くシヨウブの意で、そしてその葉の大きさは、ちょうどシヨウブと同じくらいである。ところが元来、菖蒲と言う中国名、すなわち漢名は、実はしよせんシヨウブそのものではなく、シヨウブは白菖と書かねば正しくない。そして菖蒲と書けば、本当はセキシヨウのことになる。このセキシヨウ

はシヨウブ属 (Acorus) のものではあれど、ずっと小形な草で溪いかに間に生じている常じょうりよく緑の宿根草しゅつこんそうであつて、冬に葉のないシヨウブとはだいぶ異なつている。

この水に生はえていて端午たんどの節句せつくに用うるシヨウブは、昔はこれをアヤメといつた。そして根が長いので、これを採とるのを「アヤメ引く」といつた。すなわち古歌こかにアヤメグサとあるのは、みなこのシヨウブであつて、今こんにち日ちいうIrisのアヤメではない。右シヨウブをアヤメといつていた昔の時代には、このIrisのアヤメはハナアヤメであつた。右Acorus属であるアヤメの名が消えて、今こんめい名いのシヨウブとなると同時に、ハナアヤメの名も消えてアヤメとなつた。

ハナシヨウブの母種^{ほしゆ}、すなわち原種のノハナシヨウブは、関西地方ではドンドバナと称するらしいが、今その意味が私には判^{わか}らない。人によつては、道祖神^{どうそじん}の祭りをトンド祭ということであるから、あるいはその時分にノハナシヨウブが咲くからというので、それでノハナシヨウブをドンドバナというのかもしれない。ドンドとトンドと多少違いはあるから、あるいはドンドバナはトンドバナというのが本当かも知れない。野州^{やしゆう}〔栃木県〕日光^{あかぬま}の赤沼^{あかぬま}の原では、そこに多いノハナシヨウブをアカヌマアヤメといっている。

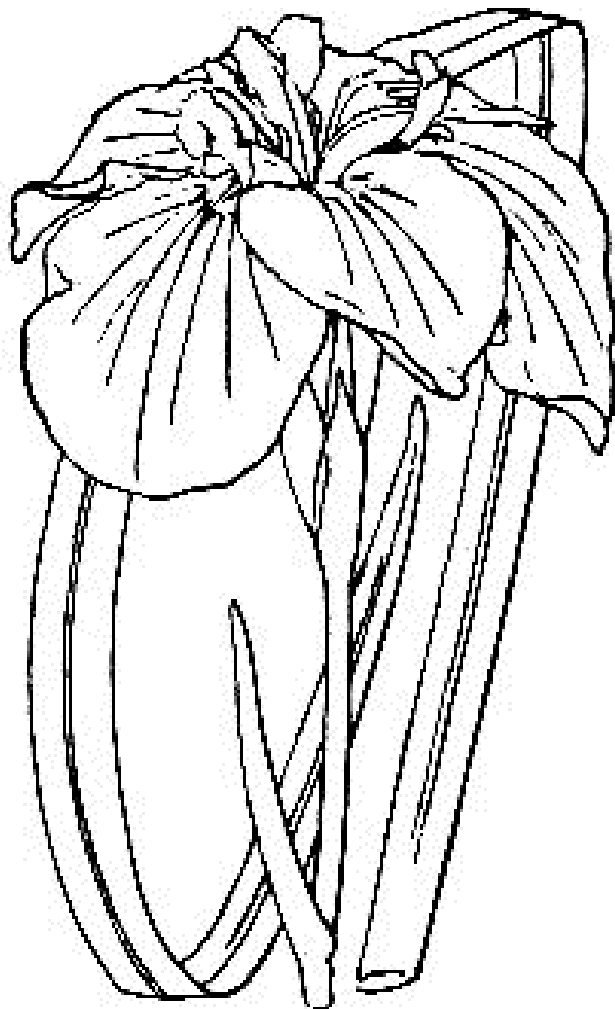
このノハナシヨウブは、どこに咲いていても紅紫色^{こうししよく}一色で、私はまだ他の色のものに出逢^{であ}ったことがない。そして花はなかなか

か風情ふぜいがある。

ハナシヨウブの図

ヒガンバナ

秋の彼岸ひがんごろに花咲くゆえヒガンバナと呼ばれるが、一般的にはマンジュシヤゲの名で通っている。そしてこの名は梵語ぼんごの曼珠沙まんじゆしやから来たものだといわれる。その訳は、曼珠沙まんじゆしやは朱華しゆかの意だとのことである。しかしインドにはこの草は生じていないから、これはその花が赤いから日本の人がこの曼珠沙まんじゆしやをこの草の名にしたもので、これに華を加えれば曼珠沙華まんじゆしやげ、すなわちマン



ジユシヤゲとなる。そして中国名は石蒜せきさんであつて、その葉がニ
ンニクの葉のようであり、同国では石地せきちに生じているので、それ
で右のように石蒜せきさんといわれている。

本種はわが邦くにいたるところに群生ぐんせいしていて、真赤な花がたく
さんに咲くのでことのほか著いちじるしく、だれでもよく知つている。毒ど
草くそくであるからだれもこれを愛あい植しよくしている人はなく、いつま
でも野の草であるばかりでなく、あのような美花びかを開くにもかか
わらず、いつも人に忌い嫌きらわれる傾向を持つてゐる。

とにかく、眼につく草であるゆえに、諸国で何十もの方言ほうげんが
ある。その中にはシビトバナ、ジゴクバナ、キツネバナ、キツネ
ノタイマツ、キツネノシリヌグイ、ステゴグサ、シタマガリ、シ

タコジケ、テクサリバナ、ユウレイバナ、ハヌケグサ、ヤクビヨ
 ウバナなどのいやな名もあるが、またハミズハナミズ、ノダイマ
 ツ、カエンソウなどの雅みやびな名もある。そしてその学名を *Lycori*
s radiata Herb. といい、ヒガンバナ科に属する。右種名の *radiata*
 は放射状ほうしやじようの意で、それはその花が花茎かけいの頂いただきに放射状、すなわ
 ち車輪状をなして咲いているからである。

野外で、また山面で、また墓場で、また土堤どてなどで、花が一時
 に咲き揃そろい、たくさんに群集して咲いている場合はまるで火事場
 のようである。そしてその咲く時は葉がなく、ただ花茎かけいが高く直
 立たてしていて、その末まつ端たんに四、五花かが車座くるまざのようになつて咲き、
 反卷はんかんせる花蓋片かがいへんは六数、雄蕊ゆうずいも六数、雌蕊しずいの花柱かちゆうが一本、

花^か下^かにある。下^{かい}位^い子^し房^{ぼう}は緑色で各小^{しょう}梗^{こう}を具^そえ^なている。

ここに不思議^{ふしぎ}なことには、かくも盛^{さか}んに花^{はな}が咲^はき誇^こるにかかわらず、いっこうに実^みを結^{むす}ばないことである。何百何千の花の中に、たまに一つくらい結実してもよさそうなものだが、それが絶對にできなく、その花はただ無^む駄^だに咲^はいているにすぎない。しかし実^みができなくても、その繁^{はん}殖^{しよく}にはあえて差^さしつかえがないのは、しあわせな草である。それは地中にある球根(学術上では鱗^{りん}茎^{けい}と呼ばれる)が、漸^{ぜん}々^{ぜん}に分裂して多くの仔^{しび}苗^{ぼう}を作るからである。ゆえに、この草はいつも群集して生^はえている。それもと一球根から二球根、三球根、しだいに多球根と分かれゆきて集^あっている結果である。

花が済むとまもなく数条の長い緑葉が出で、それが冬を越し翌年の三月ごろに枯死する。そしてその秋、また地中の鱗茎から花茎が出て花が咲き、毎年毎年これを繰り返している。かく花の時は葉がなく、葉の時は花がないので、それでハミズハナミズ（葉見ず花見ず）の名がある。鱗茎は球形で黒皮これを包み、中は白色で層々と相重なっている。そしてこの層をなしている部分は、実に葉のもとが鞘を作っていて、その部には澱粉を貯え自体の養分となしていること、ちょうど水仙の球根、ラツキヨウの球根などと同様である。そしてそこは広い筒をなして、たがいに重なっているのである。

近來は澱粉製造の会社が設立せられ、この球根を集め砕き

それを製しているが、白色無毒な良好澱粉が製出せられ、食用に供せられる。元来、この球根にはリコリンという毒分を含んでいるが、しかしその球根を搗き碎き、水に晒して毒分を流し去れば、食用にすることが出来るから、この方面からいえば、有用植物の一に数うることが出来るわけだ。

この草の生の花茎を口で噛んでみると、実にいやな味のするもので、ただちにそれが毒草であることが知れる。女の子供などは往々その茎を交互に短く折り、皮で連なつたまま珠数のようになし、もてあそんでいることがある。

『万葉集』にイチシという植物がある。私はこれをマンジュシャゲだと確信しているが、これは今までだれも説破したことのない

私の新説である。そしてその歌というのは、

路の辺の壺師の花の灼然く、人皆知りぬ我が恋妻を

である。右の歌の灼然の語は、このマンジュシヤゲの燃ゆるがごとき赤い花に対し、実によい形容である。しかしこのイチシという方言は、今日あえて見つからぬところから推してみると、これはほんの狭い一地方に行われた名で、今ははやく廃れたものであるう。

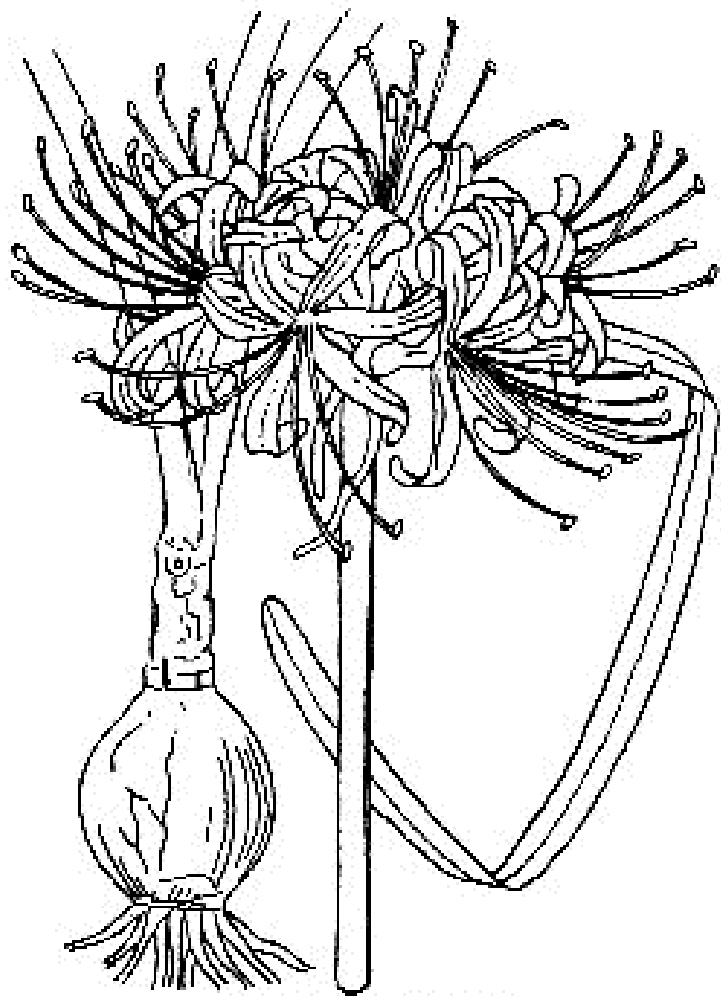
このマンジュシヤゲ、すなわちヒガンバナ、すなわち石蒜は日本と中国との原産で、その他の国にはない。外国人はたいへん

に球根植物を好くので、ずっと以前にこのマンジュシヤゲの球根が、多数に海外へ輸出せられたことがあった。

ヒガンバナの図

オキナグサ

春に山地に行くと、往々おうおうオキナグサという、ちよつと注意を惹く草に出逢であう。全体に白毛はくもうを被かぶつていて白く見え、他の草とはその外観が異つているので、おもしろく且かつ珍しく感ずる。葉は分裂ぶんれつしており、株かぶから花茎かけいが立ち十数センチメートルの高さで花を着つけている。花は点頭てんとうして横向きになっており、日光が



当たると能く開く。花の外面に多くの白毛が生じており、六片の花片（実は萼片であつて花弁はなく、萼片が花弁状をなしている）の内面は色が暗紫赤色を呈している。花内に多雄蕊と多雌蕊とがある。わが邦の学者はこの草を漢名の白頭翁だとしていたが、それはもとより誤りであつた。この白頭翁はオキナグサに酷似した別の草で、それは中国、朝鮮に産し、まつたくわが日本には見ない。ゆえに右日本のオキナグサを白頭翁に充てるのは悪い。

さてこの草をなぜオキナグサ、すなわち翁草というかといふと、それはその花が済んで実になると、それが茎頂に集合し白く蓬々としていて、あたかも翁の白頭に似ているから、それで

オキナグサとそう呼ぶのである。この蓬ほうほう々となつてゐるのは、その実の頂いただきにある長い花柱かちゆうに白毛はくもうが生じてゐるからである。

この草には右のオキナグサのほかになおたくさん各地の方言があつて、シヤグマガサ、オチゴバナ、ネコグサ、ダンジヨウドノ、ハグマ、キツネコンコン、ジイガヒゲ、ゼガイソウもその内名である。右のゼガイソウは、すなわち善界草ぜんがいそうで、これは謡うきよく曲うきよくにある赤態しやくまを着つけた善界坊ぜんがいぼうから来た名である。

『万葉集』にこの草を詠よみ込んである歌が一つある。すなわちそれは、

芝しばつき付つきの美宇良崎みうらざきなるねつこぐさ、相見あれこずあらば我恋われこひめや

も

である。そしてこのネツコグサは、ネコグサの意で、オキナグサを指している。花に白毛が多いので、それで猫草といったものだ。

このオキナグサは山野の向陽地に生じ、春早く開花するので、子女などに親しまれ、その花を採って遊ぶのである。葉は花後に大きくなる。根は多年生で肥厚しており、毎年その株の頭部から花、葉が萌出するのである。

この草はキツネノボタン科に属し、その学名を *Anemone cernua* Thumb. とも、また *Pulsatilla cernua* Spreng. ともいわれる。そし

てその種名の *cernua* は點頭てんとう、すなわち傾垂けいすいの意で、それはその花の姿勢しせいに基もとづいて名づけたものだ。
オキナグサの図

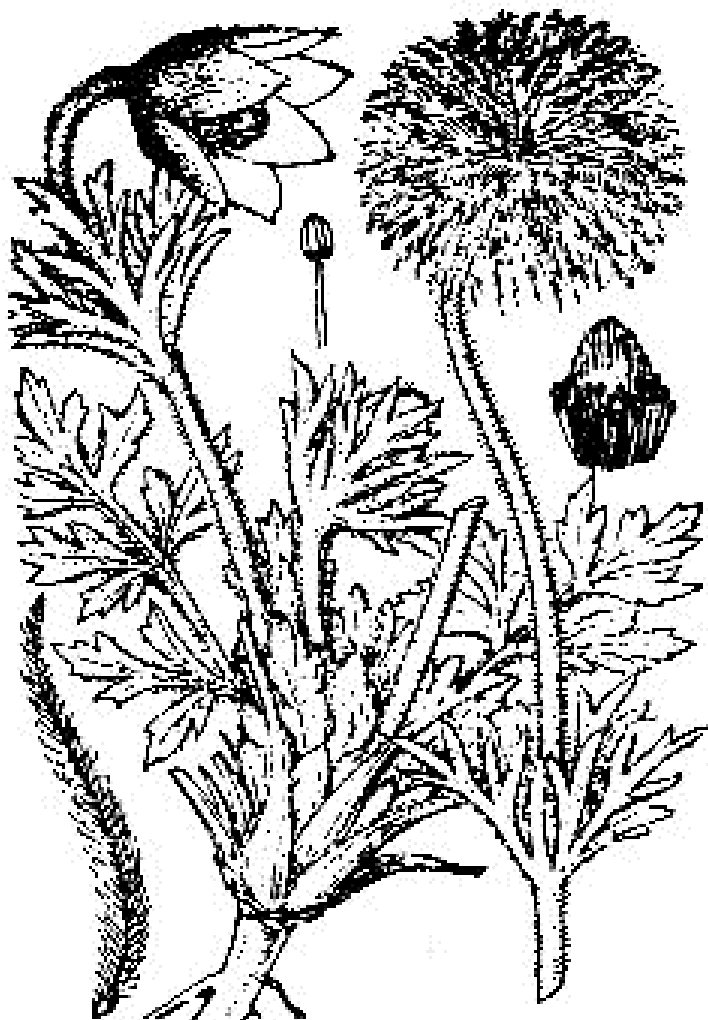
シユウカイドウ

シユウカイドウ、すなわち秋海棠はもと中国原産の植物である。昔寛永かんえいねんかん年間に日本へ渡り来つて、いまは各地に繁殖はんしよくしているが、しかし多くは栽うえられてある。たまに寺の後庭などに野生やの姿となつている所があれど、これは元もとからの野生ではないけれど、人によつてはそこに野生があると疑つてゐることがある。

けれどもそれは、まったく思い違いである。

日本では、この中国名の秋海棠を音読したシユウカイドウを、そのまま和名わめいにしているが、さらにヨウラクソウ（瓔珞草の意）、ナガサキソウ（長崎草の意）の別名があれど、一般にはいわない。

そしてこのヨウラクソウは、花の見立てから来た名、ナガサキソウは、その渡来とらいした地に基づき名もとづけたものである。本品はシユウカイドウ科に属し、*Begonia Evansiana* Andr. の学名を有しているが、この *Begonia* 属のものは温室植物として多くの種類がある。みなその茎葉けいように酸味さんみを含んでいるが、それは蔘酸しゅうさんである。



秋海棠しゅうかいどうは宿根草本しゅつこんそうほんであるが、冬は茎も葉もなく、春に

黒ずんだ地中のタマネ、すなわち球茎きゅうけいから芽が出て来る。ゆ

えに一度栽うえておくと、年々生じて開花する。茎は立くつて六〇〜

九〇センチメートルの高さとなり枝えだを分わかっている。葉は大形で

葉柄ようへいを具そなえ、茎に互生ごせいしている。その葉面ようめんは心臟形で左右不

同の歪形わいけいを呈ていし、他の植物の葉とはだいぶ葉形が異なっている。

茎と共に質ともが柔やわらかく、元来がんらいは緑色なれども、赤味おを帯おびてい

るから美しい。

茎くきの上部じょうぶに分枝ぶんしし、さらに小梗しょうこうに分かれて紅色こうしよくの美花びかを着

け垂たれているが、その花には雄花ゆうかと雌花しつかとが雑居ざつきよして咲いてお

り、雄花ゆうかは花中かちゆうに黄色やうの葯やくを球形きゆうけいに集めた雄蕊ゆうずいがあり、雌花しつか

は花^か下に三つの翼^{よく}ある子房^{しぼう}がある。このように、一株^{かぶ}上に雄花^{ゆうか}と雌花^{しか}とを持つている植物を、植物学上では一家^か花植物と呼んでい
る。すなわち雌雄^{しゆうどう}同株^{どうしゆ}植物である。

中国の書物には、秋海棠^{しゅうかいどう}を一に八月春と名づけ、秋^{しゅう}色^{しよく}

ちゆう

中の第一であるといい、花は嬌冶^{きやうじ}柔媚^{じゆうび}で真に美人^{よそお}が粧^{よそお}いに

倦^うむに同じと讚美^{さんび}している。また俗間^{ぞくかん}の伝説では、昔一女子が

あつて人を懐^{おも}うてその人至らず涕^{てい}涙^{ない}下つて地に洒^{そそ}ぎ、ついにこ

の花を生じた。それゆえ、この花は色^{あで}が嬌^{あで}やかで女のごとく、よ

つて断腸^{だんちやう}花と名づけたとある。実際にその咲いている花に対せ

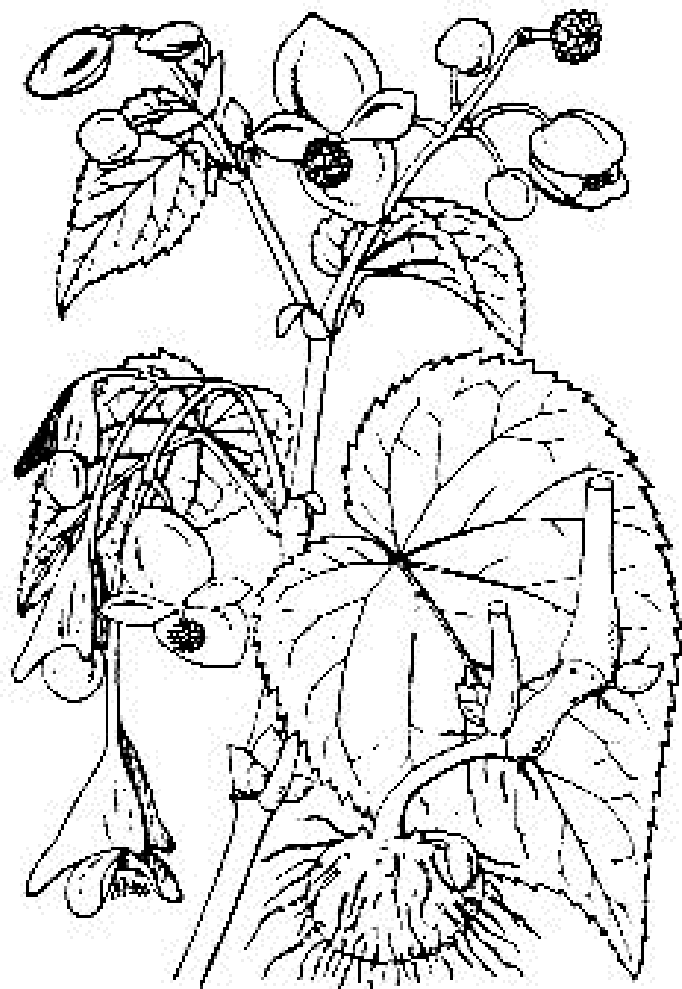
ば淡^{たん}粧^{しやう}美人のごとく、実にその艶美^{えんび}を感^{かん}得^{とく}せねば措^おかない

的^{てき}のものである。

栽培はきわめて容易で、家の後ろなどに栽うえておくと年々能よく繁はん茂もして開花する。その茎けい上じょうに小珠芽しょうしゅがができて地に落ちるから、それから芽が出て新株しんしゅが殖ふえる特性を有している。

日本にはこのシユウカイドウ科の土産植物どくさんは一つもなく、ただあるものは外国渡来とらいの種類のみである。温室内にあるタイヨウベゴニア（大葉ベゴニア）は、大なる深緑色葉面しんりよくしよくようめんに白斑はくてんがあつて、名高い粧しょうしよく飾用しよくの一種である。
シユウカイドウの図

ドクダミ



ドクダミと呼ぶ宿根草しゅつこんそうがあつて、たいていどこでも見られる。人家じんかのまわりの地にも多く生じており、摘むつといやな一種の臭気しゅうきを感ずるので、よく人が知つてゐる。また民間ではこれを薬用に用いるので有名でもある。ドクダミとは毒痛どくいたみの意だともいわれ、またあるいは毒を矯め除くのぞの意だともいわれ、身体からだの毒を追い出すに使われている。また頭髪とうはつを洗うにも使われ、またあるいは風呂ふろに入れて入浴する人もある。すなわち毒を除くというのが主である。佐渡さどではドクマクリというそうだが、これは毒を追い出す意味であらう。

この草の中国名はしゅうであるが、ドクダミは今こんにち日本での通名である。これをジュウヤクじゅうやくというのは薬やくの意、またシユウ

サイというのはしゅうさい菜の意である。草の臭しゅうき氣に基もとづきイヌノヘドクサといい、その地下ちかけい茎は白く細長いからジゴクソバの名がある。またボウズグサ、ホトケグサ、ヘビクサ、ドクグサ、シビトバナなどの各地方言があるが、みなこの草を唾だき棄したような称で、畢ひつきよう竟不快なこの草の臭しゅうき氣を衆しゅうじん人が嫌きらうから、このように呼ぶのである。馬を飼かうに十種の薬の効こう能があるから、それで十薬という、といわれているのはよい加減かげんにこしらえた名で、ジウヤクとは実はじゅうやく薬から来た名である。

この草は春に苗なえを生なずるが、それは地中に蔓まんえん延せる細長い地下ちかけい茎から出て来る。茎くきは直立して三〇センチメートル内外となり、心臟状円形で葉裏帯紫色の厚やわい柔らかな全辺葉ぜんぺんようを互生ごせいし、葉ようハ

柄本いほんに托葉たくようを具そなえている。茎くきの梢こずえに直径一〜二センチメートルの白花を開くが、その花は四花卉かべんがあるように見えるけれど、これは花卉よそおを粧よそおうている葉の変形物なる苞ほうである。そしてその花の中央から一本の花軸かじくが立って、それに多数の花を着つけているが、しかしその花はみな裸かくで萼がくもなければ花卉よそおもなく、ただ黄色おうしよくやの葯くある三雄ゆうずい蕊いと一雌しずい蕊いとのみを持つているにすぎなく、まことに簡単かんたん至極しごくな花ではあるが、これに引き換えかその白色四片へんの苞ほうはたいせつな役目つとを勤つとめている。

すなわち目に着つくその白い色しろかんぼんを看板かんぼんにして、昆虫を招まいているのである。昆虫はこの白看板しろかんぼんに誘さそわれて遠近きんから花きたに來り、花かちゆう中に立たっている花軸かじくの花を媒助ばいじよしてくるのである。けれ

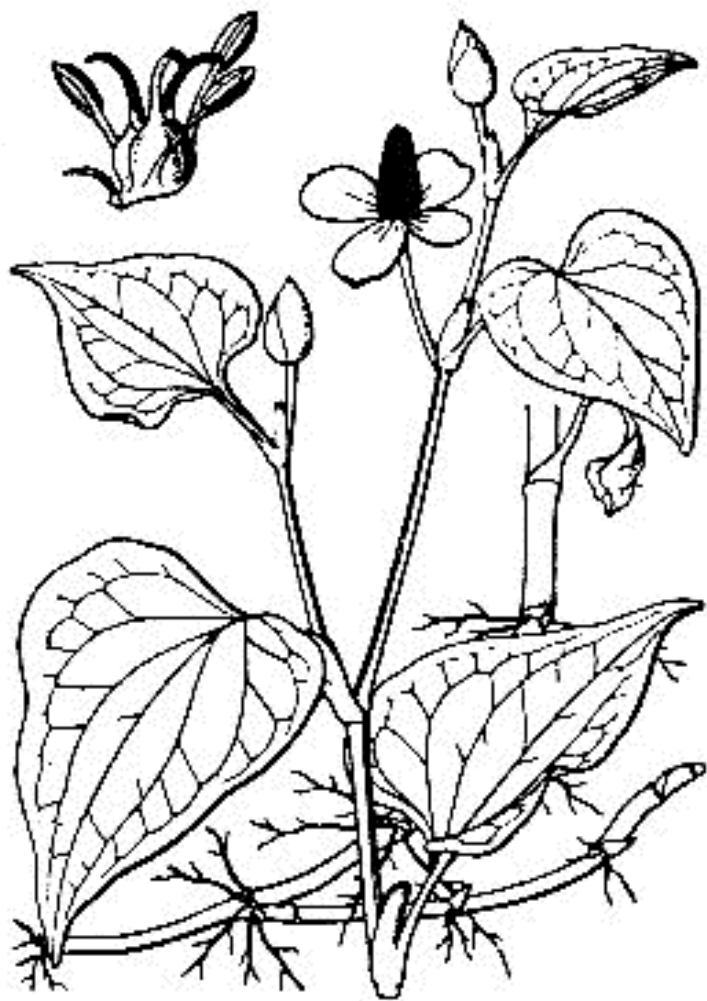
ども昆虫はただでは来なく、利益交換の蜜が花中にあるので、それでやって来るのである。この草が群をなして密生している所では、草の表面にその白花が緑色の葉を背景に点々とたくさんに咲いていて、すこぶる趣がある。

このドクダミははなはだ抜き去り難く、したがって根絶せしめることはなかなか容易でなく、抜いても抜いても後から生え出るのである。それもそのはず、地中に細長い白色地下茎が縦横に通っていて、苗を抜く時にそれが切れ、依然として地中に残り、その残りからまた苗が生えるからである。この地下茎を蒸せば食用にするに足るとのこと、また地方によりこれから澱粉を採って食しているところがある。

この草は日本と中国との原産で、もとより欧米おうべいにはない。欧州のある植物園では非常に珍しがって、たいせつに栽培してあるとのことだ。

このドクダミはハンゲシヨウ科に属し、*Houttuynia cordata* Thunb. の学名で世界に通っている。この属名はオランダの学者で日本の植物をも書いたホツタインの姓せいを取ったものだ。種名のコルダタは心臓形の意で、その葉形ようけいにもと基づいて名づけたわけだ。
ドクダミの図

イカリソウ



イカリソウは錨草の意で、その花形かけいに基づいて名づけたものである。実際その花はちようど錨いかりを下さげたようなおもしろい姿ていを呈ていしているので、この草を庭に栽うえるか、あるいは盆ぼん栽さいにしておき、花を咲かすと、すこぶる趣おもむきがある。栽培はいたつて簡易かんいで且かつその草もじようぶであるから、一度栽うえておくと毎年その時季じきには花が眺ながめられる。

春に新葉しんようと共に茎けい上じように短い花穂かすいをなし、数花が咲くのだが、ちよつと他に類のない珍めづらしい花形かけいである。これを地に栽うえるとよく育ち、毎年花が着つく。東京付近のクヌギ林の下などには、諸処きに野生しているから、これを採集して来きて栽うえるとよろしい。種類によつては白花のものもあるが、東京近辺のものはみな淡紫たん

花しかの品ばかりである。

花には萼がく、花卉、雄蕊ゆうずい、雌蕊しずいが備そなわつていて、植物学上でいう完備花かんびかをなしている。萼がくは元来がんらい、八片へんよりなっているが、しかしその外側の小さき四片は早く散落さんらくし、内側の四片が残つて花卉状ていを呈らんじょうひしんけいし、卵状披針形らんじょうひしんけいをなして尖とがり平開へいかいしている。花卉が四個あつて、前記残留ざんりゆうの四萼がくへん片ともと共に花の主部をなしており、著いちじるしい長距ちようきよがあつて四方に突つき出いで、下に向かつて少しく弯わんきよく曲まがしている。すなわちこれが錨いかりの手に当たる部である。

この長い距きよの底には、蜜液みつえきが分泌ぶんびつせられていて、花は昆虫の来るのを待っている。この虫媒花ちゆうばいかであるイカリソウの花へは

長いくちばし嘴を出すちよう蝶が訪れ、蜜を吸いに来て頭を花中へ差し込むときその頭へ花粉を着つけて、これを他の花の花柱かちゆうの柱ちゆう頭へ伝えるのである。そして花柱のもとにある子房しぼうが、ついに果実となるのである。

花中かちゆうには四雄蕊ゆうずいがある。その長い葯やくは、葯胞やくほうの片へんがもとから上の方に巻まき上がって、黄色の花粉を出している特状がある。このような葯やくを、植物学上では片裂葯へんれつやくと称している。雌蕊しずいは一本で、緑色の子房しぼうとほとんど同長な花柱かちゆうが上に立っており、その頂いただきかとうに花頭があつて花粉を受けている。

葉は、地下茎ちかけいから出で立つ一本の長い茎くきの頂いただきから一方は花穂かすいとなり、一方はこの葉となつて出でいて長柄ちようへいがあり、それが三

柄へいに分かれ、さらにそれが三小柄しょうへいに分かれて各小柄しょうへいごと
 に緑色の一小葉片しょうようへんが着ついている。葉片ようへんは心臟状卵形で尖とがり、
 葉縁ようえんに針状齒しんじょうしがあり、花後かごにはその葉質ようしつが剛かたくなる。かく
 しょうよう
 小葉しょうようが一葉ように九片へんあるので、それで中国でこの草を三枝九葉しちくよく
 うそう
 草そうというのだが、淫羊いんようかくというのがその本名である。しかし
 この淫羊いんようかくの名は、この類の総称のようである。

右漢名かんめい（中国名のこと）の淫羊いんようかくに就つき、中国の説では、
 羊がこの葉かく（かく）を食べば、一日の間に百遍へんも雌雄相通しゆうあいつうずるこ
 とができる効力を持つていと信ぜられている。昔からこんな伝
 説が右のとおり中国にあるので、日本でもこれが成分を研究して
 みた人があったが、なにもそんな不思議ふしぎな効力はないとの結論で、

たちまちその研究熱が覚めてしまつて、今日ではだれもその淫
んようかくせつ羊 説を信ずる馬鹿者ばかものはなくなつた。

かのタデ科に属し、地下茎ちかけいに塊根かいこんのできる何首烏かしゅうすなわちツ
 ルドクダミも、一時はそれが性欲せきよくに利きくとて、やはり中国の説が
 もとで大騒ぎをしてみたが、結局はなんの効こうも見つからず、阿呆あほう
 らしいですんでしまつた。

イカリソウはヘビノボラス科に属し、右の名のほかになおクモ
 キリソウ、カリガネソウ、カナビキソウなどの別名がある。

イカリソウの図



果实

果実

世間せけんふつうには果実というといわゆるクダモノであつて、リンゴ、カキ、ミカンなどの食用になる実を呼んでいるのであるが、しかし植物学上で果実と称するものは、花の後にできる実をすべて果実といい、通俗とは大いにその呼び方が異なつてゐる。そしてそれはあえて食用になると、ならないとにかかわらず、すべてをそういつている。ゆえにシソ、エゴマの実のようなものでも果実であり、また右のリンゴ、カキなどのようなものでもむろん果実である。

花の中の子房しぼうが花後かごに成熟して実になったものは、果実そのものの本体で、すなわち正果実である。

ウメ、モモ、ケシ、ダイコン、エンドウ、ソラマメ、トウモロコシ、イネ、ムギ、ソバ、クリ、クヌギ、ならびにチャの実などがそれである。

また、果実には他の器官が子房しぼうと合体し、共同で一の果実をなしているものもある。すなわちリンゴ、ナシ、キュウリ、カボチャ、メロンなどがそれである。

また、他の器官が主部となって果実をなしているものもあつて、そんな場合は、これを擬果ぎかとも偽果ぎかとも称となえる。すなわちオランダイチゴ、ヘビイチゴ、イチジク、ノイバラの実などがそれであ

る。

果実の食用となる部分は、果実の種類によつてかならずしも一様ではない。モモ、アンズなどは植物学上でいうところの中^{ちゆう}果皮^{かひ}の部を食用とし、リンゴ、ナシなどは実を合成せる花托部^{かたくぶ}を食^{しょく}しており、ミカンは果内^{かない}の毛を食し、バナナは果皮^{かひ}を食し、イチジクは変形せる花軸部^{かじくぶ}を食用^{きよう}に供している。

いろいろの果実、すなわち実を研究してみるとなかなかおもしろいもので、ふつう世人^{せいじん}が思っているよりほか、意外な事実を發見するものである。次に四つの果実について、おのおのその趣味ある特状を述べてみましょう。

リンゴ

リンゴの果実は、これを縦たてに割つたり横に切つたりして見れば、よくその内部の様子がわかるから、そうして検けんして見るがよい。

その中央部に五室に分かれた部分があつて、その各室内には二個こずつの褐かっしよく色な種子たねが並ならんでいる。そしてその外側に区切りがあつて、それが見られる。すなわちこの区切りを界さかいとしてその内部が真の果実であつて、この果実部はあえてだれも食わなく捨てるところである。そしてこの区切りと最さい外の外皮がいひのところまでの間が人の食しょくする部分であるが、この部分は実は本当の果実（中心部をなせる）へ癒ゆ合した付属物で、これは杯はい状じようをなし

た花托かたく（すなわち花の梗くきの頂部ちやうぶ）であつて、それが厚い肉部となつているのである。

これで見ると、このリンゴの実は本当の果実は食われなく、そしてただそのつきものの変形せる花托かたく、すなわち花梗かこうの末端まつたんを食つていことになるが、しかしリンゴを食う人々は、植物学者かあるいは学校で教えられた学生かを除くのほかは、だれもその真相を知っているものはほとんどないであろう。

このリンゴは英語でいえばアップルである。今日こんにちの日本人はだれでもこれをリンゴといつてすましてゐるが、実をいうとこれはリンゴではなくて、すべからくそれをトウリンゴまたはオオリング、あるいはセイヨウリンゴといわねばならぬものである。そ

して漢字で書けば苹果でありまた柰である。

元がんらい来、本当のリンゴは林檎であつて、これはその実の直径お

よそ三センチメートル余りもない小さいもので、あえて市場へは出てこなく、日本では昔その苗木なえぎがわが邦くにへ渡つて今日 信州しんしゅう

〔長野県〕あるいは東北地方にわずかに見るばかりである。元がんら

来、日本の原産ではなけれども、これを西洋リンゴのアップルと區別せんがために和わリンゴといわれている。すなわち日本リンゴの意である。

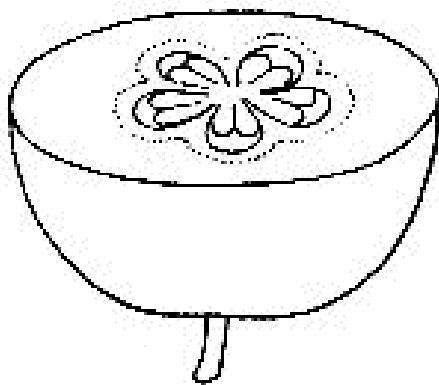
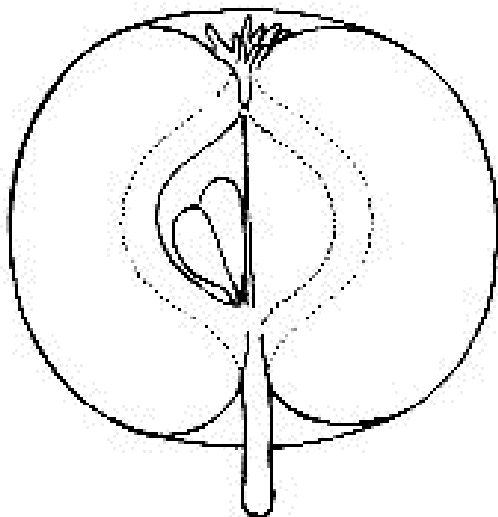
アップルすなわち西洋リンゴは、明治の初年にはじめて西洋から伝わりて爾後じごしだいに日本に拡まりひろ、今日こんにちでは東北諸州ならばに信州からその良果が盛さかんに市場に出回りでまわり、果実店頭を飾かざる

ようにまでなったのである。

アップルを学名でいえば *Malus pumila* var. *domestica* であつて、前の和^わリンゴは *Malus asiatica* である。元^{がんらい}来リンゴは林檎（和リンゴ）の音であるから本当のリンゴをいう場合は何もいうことはないが、今^{こんにち}日のように西洋リンゴ（トウリンゴ）を単にリンゴと呼ぶのは、実は当^{とう}を得たものではないことを知っていなければならぬ。

リンゴの図

ミカン



ミカンすなわち蜜柑は、食用果実として名高く且つ最もふつうのものであるが、世人はそのミカンの実のいずれの部分も味わっているのか知らぬ人が多いのであろう。そしてそのミカンは、その毛の中の汁を味わっている、と聞かされるとみな驚いてしまうだろうが、実際はそうであるからおもしろい。もし万一ミカンの実の中に毛が生えなかつたならば、ミカンは食べぬ果実としてだれもそれを一顧もしなかつたであらうが、幸いにも果中に毛が生えたばかりに、ここに上等果実として食用果実界に君臨しているのである。こうなつてみると毛の価もなかなか馬鹿にできぬもので、毛頭その事実には偽りはない。

ミカンの属は学問上ではシトルス (Citrus) と称し、属中には

多数の種類を含んでいる。日本にあるダイダイ、クネンボ、ウンシユウミカン、ナツミカン、コウジ、ユズ、ベニミカン、ヤツシロミカン、レモン、マルブシユカン、トウミカン、コナツミカン、オレンジ、サンボウカン、ザボン、キシユウミカン（コミカン）、ポンカン（元来台湾産、九州に作っている所がある）などみなその果実の構造は同一で、いずれも甘汁もしくは酸汁を含んでいる毛がその食用源をなしているのである。これらミカン類の貴さも、つまるところは前述のとおりその果内の毛に帰するわけだ。

ミカン類の果実は、植物学上果実の分類からいえば漿果と称すべきであるが、なお精密に言えば漿果中の柑橘果と呼ぶ

べきものである。

ミカン類の果実を剥いて見ると、表面の皮がまず容易にとれる。その中には俗にいうミカンの囊ふくろが輪列りんれつしていて、これを離せば個々に分かれる。そしてその囊ふくろの中に汁しるを含んだ膨ぼう大だいせる毛と種子とがあつて、その毛はその囊ふくろの外方の壁へきめん面から生じており、その種子は内方の底から生じている。つまり右の毛と種子とは反対側から出て、たがいに向き合っているのである。すなわち図上ひだりすみ左隅ひだりすみにその毛の生じ具合ぐあいが示され、またそれとならんでその右隅には、成熟した毛が描かれている。子房しぼうがまだ若いときは（左側中央の図）、その各室内にまだ毛は生じていないが、花が終わって後子房しぼうが日増しに大きくなるにつれ、漸次ぜんじにその外方の

内^{ないへき}壁から毛が生じ始める。そして後には図の下方にあるミカン半^{はんき}切れ図が示すように、右の毛は囊^{ふくろ}の中いつぱいに充^{じゅう}満^{まん}する。

右のとおり、その半^{はん}切れ図^{くしつ}で表^{あらわ}してあるように、果実の中は幾^い室^{しつ}にも分かれていて、この果実は実^{じつ}は数個の一室果実から合成せられていることを示している。すなわち一花中に数子房があつて、それがたがいに分^{ぶんりつ}立^たせずして癒^{ゆちやく}着^{やく}し、ここに複成子房をなしているのである。ゆえにその囊^{ふくろ}は数個連合してはいるが、これを離せば容易に離れて個々の囊^{ふくろ}となるのである。ただその外側に当たる外皮^{がいひ}が割れ目なしに密に連合しているので、それがミカンの皮^{かひ}をなしている。そして果実全体からいえば、その部が外^が果^い皮^{かひ}と中^{ちゆう}果^{かひ}皮^{かひ}とに当たり、囊^{ふくろ}の部分が内^{ない}果^{かひ}皮^{かひ}と果実の本部とに当

たるのである。

なお図に種子が描いてあるが、この種子はなんら食用とはならず捨て去られるものである。しかしおもしろいことには、一つの種皮の中に子葉（貝割葉）、幼芽、幼根から成る胚が二個もしくは数個あることで、そこでこれを地に播いておくと一つの種子から二本あるいは数本の仔苗が生え出てくることで、これはあまり他に類のないことである。

ミカン類の葉はみな一片ずつになつていて、それが枝に互生しているが、しかしミカン類の葉は祖先は三出葉とて三枚の小葉から成り、ちようどカラタチ（キコク）の葉を見るようであったことが推想せられる。つまり前世界時代のミカン類の葉は、

みな三出葉であつたのである。その証拠しやうことして今日こんにちあるミカンの苗なえにははじめ三出葉が出いで、次ついで一枚の常葉じやうよう（単葉）が出ていることがたまに見られ、またザボンの苗なえの葉柄ようへいに幹みきから芽出めだつ葉にもまた三出葉が見られることがあつて、つまり遠い遠い前世の時の葉を出しているのであることは、すこぶる興味ある事実を自然が提供しているのである。

それからいま一つミカン類にとつておもしろいことは、その枝しじょう上にある刺針ししん、すなわちトゲの件である。そしてこのトゲは、元がんらい来はこの樹きを食害する獸類（それは遠い昔の）などを防禦ぼうぎよするために生じたものであろうが、こんな開けた世にはそんな害が獣いじゆうもいないので、したがつてそのトゲもまったく無用の長ちやう

物ぶつとなつてゐる。

しかし学問上からそのトゲは何であるのかを究きゆうめい明めいするのは、すこぶる興味ある問題の一つである。従来日本のある学者は、それは葉の変形したものだと言つた。またある学者は、それは枝の変形したものにほかならないと唱となえた。これらの学者のいう説にはなんら確かくたる根こん拠きよはなく、ただ外から観みた想像説でしかない。そこで私の実検上からの観察では、これは葉ようえき腋あきにある芽よちを擁ようしているその鱗りんぺん片ぺんの最さい外がいのものが大いに増大し、大いに強力となつてついにトゲにまで進展發育したものにほかならず、それはそのトゲの位置がそれをよく暗示しているので、これは動かし難がたいものである、と私は自分で発見したこの自説こしゆを固守こしゆしている。

次第だ。しだい

よく世人せいじんはタチバナ（橘の字を当てているが、実は橘はクネンボの漢名であつてタチバナではない）ということを用いるが、それはタチバナとはどのミカンを指したさものかというところ、いま確説をもつていうことはできぬが、たぶん今こんにち日にちいうキシユウミカン、一名コミカンのようなミカンをついたものではなからうかと思われ。

かの昔、田道間守たじまもりが常世とこよの国（今どこの国かわからぬが、多分中国の東南方面のいずれかの地であつたことが想像せられる）から持つて歸つて来たというもので、それはむろん食用に供すべきミカンの一種であつたわけだ。その当時はむろん日本ではまこと

に珍しいものであつたに相違ない。そしてそのタチバナの名は、その常世とこよの国からはるばると携たずさえ歸朝きちようした前記の田道間守たじまもりの名にちなんで、かくタチバナと名づけたとのことである。

珍しくも日本の九州、四国、ならびに本州の山地に野生やせいしているミカン類の一種に、通常タチバナといつていものがある。黄色の小さい実がなるのだが、果実が小さい上に汁しるが少なく種子が大きく、とても食用の果実にはならぬ劣等れつとうしごく至極なミカンである。これを栽さい植いしよくしたものが時とき折おり神社の庭などにあるのだが、そんな場合、多少実が大きく、小さいコウジの実ぐらいになつているものもあれど、食用果実としてはなんら一顧いっこの価値でもないものである。

世人せいじんはタチバナの名あこがに憧あこがれて勝手にこれを歴史上のタチバナと

結びつけ、貴とうとんでいることがあれど、これはまことに笑しょう止し千せん

万まんな僻ひがごと事ことである。かの京都の紫宸殿ししんでん前の右近うこんの橘たちばなが畢ひつきよう竟きやう

この類るいにほかならない。そしてこんな下等げとうな一小ミカンが前記

歴史上のタチバナと同じものであるとする所説しよせつは、まったく噴ふんぱ

飯いんものである。要するに、歴史上のタチバナと日本野生品にっぽんせいひんのタ

チバナとは、全然関係かんけいのないミカンであることを私は断言だんげんする。

前記ぜんきのとおりわが邦くに野生せいせいのいわゆるタチバナに、かくタチバナ

の名なを保もたしておくのは元がんらい来らい間違いであるのみならず、前から

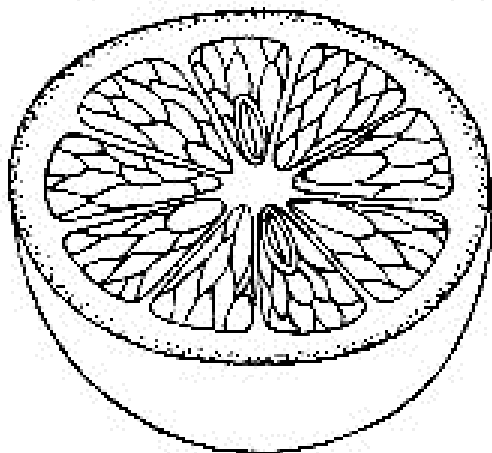
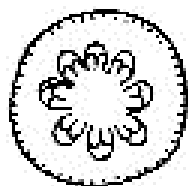
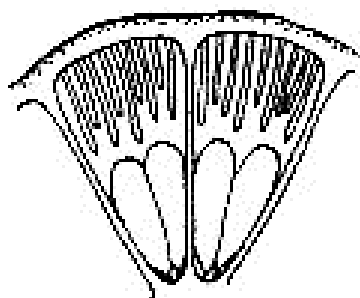
すでにある歴史上のタチバナの本物ほんぶつと重複じゅうふくするから、これをヤマ

トタチバナと改称かいせうすると提議ていぎしたのは、土佐とさ〔高知県〕出身しゅしんで当

時柑橘界かんきつかいの第一人者であつた田村利親氏としちかであつたが、その後、私はさらにそれを日にっぽん本タチバナの名に改訂かいていした。

なぜそうしたかという、ザボンの一品に疾とくヤマトタチバナの名称があつたからであつた。ちなみに右田村氏は、かつて日ひゆう向がの国〔宮崎県〕において一の新蜜柑しんみかんを発見し、これを小夏こなつ蜜柑みかんと名づけて世に出した。すなわち小形の夏蜜柑なつみかんの意で、そのとおり夏蜜柑なつみかんよりは小形である。そしてその味は夏蜜柑ほど酸すつぱくなくて甘味あまみを有している。これは四、五月ごろに市場に現あらわれ、サマー・オレンジと称している。この品は田村氏をはじめて見いだしたので、一に田村蜜柑みかんとも呼んでいる。

ミカンの図



バナナ

元^{がんらい}来バナナ (Banana) はその実のできるミバショウ (学名は *Musa paradisiaca* L. subsp. *sapientum* O. Kuntze) の名であるが、日本民間でふつうにバナナというと、その実 (果実) を指^さして呼んでいる。しかし西洋でも同様にその実をバナナと叫んでいることもないではないが、これを正しくいうならバナナの実と呼ぶべきである。

さて、果実としてのバナナは元^{がんらい}来そのいずれの部分^{しよく}を食しているかという点、実はその果実の皮を食している点、これはけ

つして嘘うその皮ではなく本当の皮である。もしもバナナにこの多たにく肉質しつをなした皮がなかったならば、バナナは果実としてなんの

役にも立たないものである。幸さいわいにも多肉質の皮が存しているために、これが賞味しょうみすべき好果実として登場しているのであるが、しかしこの委曲いきよくを知悉ちしつしていた人は世間せけんに少ないと思う。ゆえにバナナは皮を食うといったら、みな怪訝けげんな顔をするのであろう。

バナナのミバシヨウ植物は、見たところ内地にあるバシヨウそつくりの形状をしている。それもそのはず、その両方が同属（*MUSA* すなわちバシヨウ属）であるからだ。葉を檢けんして見ると、バナナの方が葉質ようしつがじょうぶで葉裏が白粉はくふんを帯びたように白はくし色よくを呈ていしており、そして花穂かすいの苞ほうが暗赤あんせき色よくであるから、わ

がバショウの葉の裏面りめんが緑色で、花穂かすいの苞ほうが多少かっしよく褐色しよくを帯びる黄色なのとすぐ区別がつく。

バナナを食うときはだれでもまずその外皮がいひを剥はぎ取り、その内部の肉、それはクリーム色をした香においのよい肉、を食しよくする。そしてこの皮と肉とは、これは共にともバナナの皮であるが、皮のように剥はげる皮は実はその外果皮がいかひで、これは纖維せんい質しつであるから、それが細胞質の肉部すなわち中果皮ちゅうかひ内果皮ないかひから容易に剥はぎ取れるわけだ。この纖維質部は食用にならぬが、食用になるのはその次にある細胞質の部のみで、これが前記のとおり中果皮ちゅうかひと内果皮ないかひとである。

元がんらい来このバナナが正しい形状を保っていたなら、こんな食くえ

る肉はできずに纖維質の硬い果皮のみと種子とが発達するわけだけれど、それがおそろしく変形して厚い多肉部が生じ種子はまったく不熟に歸して、ただ果実の中央に軟らかい黒ずんだ痕跡を存しているのみですんでいる。すなわちこれは果実の常態ではなく、まったく一の変態で、つまり一の不具である。すなわちこれが不具であつてくれたばかりに、吾人はこの珍果を口にする幸運に遭つているのである。要するに、われらはバナナの中果皮、内果皮なる皮を食つて喜んでゐるわけだ。

わが邦にあるバシヨウにも花が咲いて果実を結ぶけれど、食うようなものはけつしてできない。このバシヨウの名は芭蕉から来たものだけれど、元来芭蕉はバナナ類の名だから、右のよう

に日本のバショウの名として用いることは反則である。昔の日本の学者は芭蕉ばしやうの本物を知らなかつたので、そこでこの芭蕉ばしやうの字を濫用らんようし、それが元もとでバショウの名がつけられ今日こんにちに及んおよでいるのである。いまさら改めあらたようもないから、まずそのままにしておくよりほか仕方しかたがない。そしてこのバショウは、元がんらい来日らいにち本ほんのものではなく昔中国から渡つて来た外がいらい来植物ぶつなのである。

中国名の芭蕉ばしやうは一いっに甘蕉かんしやうともいい、実はバナナ、すなわちその果実の味あまの甘いバナナ類を総称した名である。ゆえにバナナを芭蕉ばしやうといい、甘蕉かんしやうといつてもよいわけだ。

数年前には台たい湾わんより多量のバナナが日本の内地に輸入せられ、大きな籠かごに入れたまま、それが神戸港こうべこうなどに陸上りくあげせられた時

はまだ緑色であつた。それを仲買人なかがいが買って地下室に入れ、数日も置くとはじめて黄色はんらんに熟じゆくするので、それからそれが市場の売店へ氾濫し一般の人々を喜ばせたものだったが、一朝いちちようバナナの宝庫の台湾が失われた後は、前日のバナナ盛せいきよう況かうを見ることはできなくなつてしまつた。

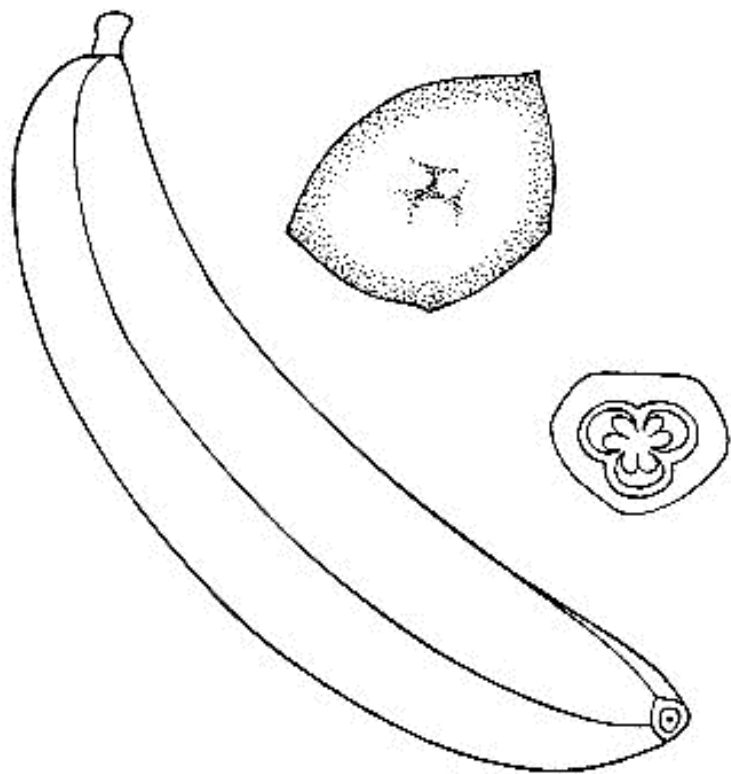
バナナの図

オランダイチゴ

オランダイチゴは今こんにち日市場では、単にイチゴと呼んで通じている。けれども単にイチゴでは物足りなく、且かつ他のイチゴ（市

場には出ぬけれど」とその名が混雑する。人によっては草くさいちご莓と呼んでいれど、これも別にクサイチゴがあるから名が重複して困る。オランダイチゴの名は回りくどくて言いにくいし、他の名は混雑、重複するし困ったものだ。あるいは西洋イチゴといってもよからうが、いつそ英語のストローベリー (Strawberry) で呼よぶかな、それがご時勢じせい向きかもしれない。

このオランダイチゴをむずかしく学名で呼ぶとすれば、それは *Fragaria chiloensis* Duch. var. *ananassa* Bailey である。日本産のモリイチゴ (シロバナヘビイチゴ) もその姉妹品しまいひんで、これは *Fragaria nipponica* Makino であり、いま一つ同属の日本産は、ノウゴイチゴで、それは *Fragaria Inumae* Makino である。このモリイチ



ゴモノウゴイチゴも共にその実はオランダイチゴそつくりで、ただ小形であるばかりである。その形、その味、その香い、なんらオランダイチゴと変わりはない。わが邦の園芸家がこれに着目し、大いにその品種の改良を企てなかつたのは、大なる落度である。

このオランダイチゴ、すなわちストローベリの実の食うところは、その花托が拡大して赤色を呈し味が甘く、香いがあつて軟らかい肉質をなしている部分である。人々はその花托すなわち茎の頂部、換言すればその茎を食しているのであつて、本当の果実を食つてゐるのではない（いっしょに口には入つて行けども）。されば本当の果実とはどこをいつてゐるかという、それ

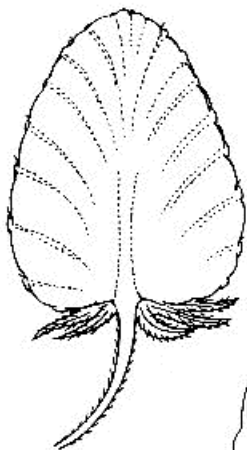
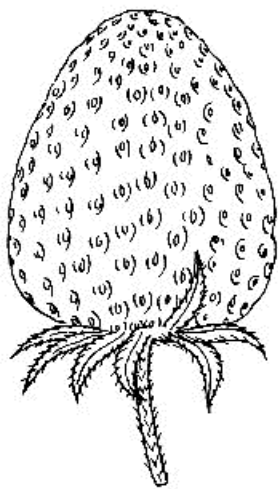
はその放大せる花托面かたくめんに散布さんぷして付着ふちやくしている細小な粒つぶじよ状うそのもの（図の右の方に描いてあるもの）である。

ゆえにオランダイチゴは食用部と果実とはまったく別で、ただその果実は花托面かたくめんに載のっているにすぎない。そして畢ひつきよう竟ここのオランダイチゴの実も一つの擬果ぎかに属するのだが、それは野外に多きヘビイチゴの実も同じことだ。このヘビイチゴの実には甘あ味まみがないからだれも食くわらない。いやな名がついていれど、もとよりなんら毒はない。ヘビイチゴとは野原へびで蛇へびの食くう莓いちごの意だ。

オランダイチゴの図

あとがき

まず以上で花と実との概説がいせつを了おえた。これは一気呵成いっきかせいに筆ふでに
まかせて書いたものであるから、まずい点もそこそこにあるであ
ろうことを恐縮おそくしている。要するに失礼な申し分ではあれど、読
者諸君を草木くさきに対しては素人しろうとであると仮定し、そんな御方おかたにな
るべく植物趣味を感じてもらいたさに、わざとこんな文章、それ
は口でお話するようなしごく通俗な文章を書いてみたのである。
もし諸君がこの文章を読んでいささかでも植物趣味を感ぜられ、
且かつあわせて多少でも植物知識を得られたならば、筆者の私は大



いに満足するところである。

われらを取り巻いている物の中で、植物ほど人生と深い関係を持つているものは少ない。まず世界に植物すなわち草木がなかったなら、われらはけっして生きてはいけないことで、その重要さが判るではないか。われらの衣食住はその資源を植物に仰いでいるものが多いことを見ても、その訳がうなずかれる。

植物に取り囲まれているわれらは、このうえもない幸福である。こんな罪のない、且つ美点に満ちた植物は、他の何物にも比することのできない天然の賜である。実にこれは人生の至宝であると言つても、けっして溢言ではないのであろう。

すいしよくした
翠色 滴たる草木の葉のみを望んでも、だれもその美と爽

快いとに打たれないものはあるまい。これが一年中われらの周囲の景致けいちである。またその上に植物には紅こう白はく紫し黄おう、色とりどりの花が咲き、吾人ごじんの眼を楽たのしませることひととおりではない。だれもこの天あまから授さずかつた花を愛せぬものはあるまい。そしてそれが人間の心しん境きように影響えいすれば、悪人あくにんも善人ぜんにんになるであろう。荒すさんだ人も雅みやびな人となるであろう。罪人ざいにんもその過去を悔悟かいごするであろう。そんなことなど思いめぐらしてみると、この微妙な植物は一の宗教である、と言えないことはあるまい。

自然の宗教！ その本尊ほんぞんは植物。なんら儒教じゆきよう、仏教と異なるところはない。今日こんにち私は飽あくまでもこの自然宗教にひたりながら日々を愉快ゆかいに過すごして、なんら不平の氣持はなく、心

はいつも平々 坦々 へいへいたんたん である。そしてそれがわが健康にも響 ひびいて、今年八十八歳のこの白髪 はくはつのオヤジすこぶる元気で、夜も二時ごろまで勉強を続けて飽 あくことを知らない。時には夜明けまで仕事をしている。畢 ひつきよう 竟 きやう これは平素 へいそ天然を楽しんでいるおかげであろう。実に天然こそ神である。天然が人生に及ぼす影響は、まことに至 しだいしちよう 大 だい 至 し 重 じゆう であると言うべきだ。

植物の研究が進むと、ために人間社会を幸福 みちびに導 みちびき人生を厚くする。植物を資源とする工業の勃 ぼつこう 興 きゆう は国の富 とみを殖 ふやし、したがって国民の生活を裕 ゆたかにする。ゆえに国民が植物に関心を持つと持たぬとよつて、国の貧富 ひんぷ、したがって人間の貧富 ひんぷが分かれるわけだ。貧 ひんすれば、その間に罪 ざい 悪 あくが生じて世が乱れるが、富 とめ

ば、余裕よゆうを生じて人間同士の礼節れいせつも敦あつくなり、風俗も良くなり、国民の幸福を招致しょうちすることになる。想おもえば植物の徳大なるかなであると言うべきである。

人間は生きている間が花である。わずかな短かい浮世うきよである。その間に大いに勉強して身を修め、徳を積み、智ちを磨みがき、人のために尽くし、国のために務つとめ、ないしはまた自分のために楽しみ、善人として一生を幸福に送ることは人間として大いに意義がある。醉生夢死すいせいむしするほど馬鹿ばかなものはない。この世に生まれ来るのはただ一度きりであることを思えば、この生きている間をうかうかと無為むゐに過すごしてはもつたいたくなく、実に神に対しても申し訳わけがないではないか。

私はかつて左のとおり書いたことがあった。

「私は草木くさきに愛を持つことによつて人間愛を養やしなうことができない、と確信して疑わぬのである。もしも私が日蓮にちれんほどの偉物えらぶつであつたなら、きつと私は、草木を本尊ほんぞんとする宗教を樹立じゆりつしてみせることができると思つている。私は今草木くさきを無駄むだに枯からすことをようしなくなつた。また私は蟻あり一匹ひとひきでも虫などでも、それを無残むざんに殺すことをようしなくなつた。この慈悲じひてきの心、すなわちその思いやりの心を私はなんで養やしない得たか、私はわが愛する草木でこれを培つちこうた。また私は草木の栄枯盛衰えいこせいすいを観みて、人生なるものを解かいし得たと自信している。

これほどまでも草木くさきは人間の心事しんじに役立つものであるのに、な

ぜ世人せいじんはこの至宝しほうにあまり関心かんしんを払はらわないであろうか。私はこれを俗ぞくに言う『食きわず嫌きらい』に帰きしたい。私は広く四方八方しやうはうの世人せいじんに向むかこうて、まあ嘘うそと思おもつて一度味あじわつてみて下さい、と絶ぜつき叫よしたい。私はけつして嘘きよげん言げんは吐はかない。どうかまずその肉にくの一いち縷れんを嘗なめてみてください。

みなの人に思おもいやりの心こころがあれば、世よの中ちゆうは実に美うつくしいことであらう。相互そうごに喧嘩けんかも起おここらねば、国くにと国くにとの戦いくさ争そうも起おここるまい。この思おもいやりの心こころ、むずかしく言えば博愛心はくあいしん、慈悲心じいしん、相愛心さうあいしんがあれば世よの中ちゆうは必ず静謐せいひつで、その人々たしは確たしかに無上むじやうの幸福きふに浴よくせんこと、ゆめゆめ疑うたがいあるべからずだ。

世よのいろいろの宗教しゆきうはいろいろの道みちをたどりてこれを世人せいじんに説と

いているが、それを私はあえて理窟を言わずにただ感情に訴えて、これを草木で養いたい、というのが私の宗教心でありまた私の理想である。私は諸処の講演に臨む時は機会あるごとに、いつもこの主意で学生等に訓話している」

また私は世人が植物に興味を持てば次の三徳があることを主張する。すなわち、

第一に、人間の本性が良くなる。野に山にわれらの周囲に咲き誇る草花を見れば、何人もあの優しい自然の美に打たれて、和やかな心にならぬものはあるまい。氷が春風に融けるごとくに、怒りもさつそくに解けるであらう。またあわせて心が詩的にもなり美的にもなる。

第二に、健康けんこうになる。植物に趣味を持つて山野さんやに草や木をさがし求むれば、自然に戸外こがいの運動が足たるようになる。あわせて日光浴つこうよくができ、紫外線しがいせんに触ふれ、したがつて知らず識しらずの間に健康が増進せられる。

第三に、人生に寂じやく寞まくを感じない。もしも世界中の人間がわれに背そむくとも、あえて悲観するには及ばぬ。わが周囲にある草木くわいそくは永遠の恋人としてわれに優やさしく笑えみかけるのであろう。

惟おもうに、私はようこそ生まれつき植物に愛を持つて来たものだと、またと得がたいその幸福を天に感謝しんたいしている次第である。

青空文庫情報

底本：「植物知識」講談社

1981（昭和56）年2月10日第1刷発行

1993（平成5）年10月20日第22刷発行

底本の親本：「四季の花と果実」教養の書シリーズ、逓信省

1949（昭和24）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※底本には、復刻するに当って「寸尺などをメートル法に換算された」と記載されています。

※図版は、各項目の末尾に置きました。

入力：川山隆

校正：門田裕志、小林繁雄

2007年12月17日作成

2012年5月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

植物知識

牧野富太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>